

みやびの風に

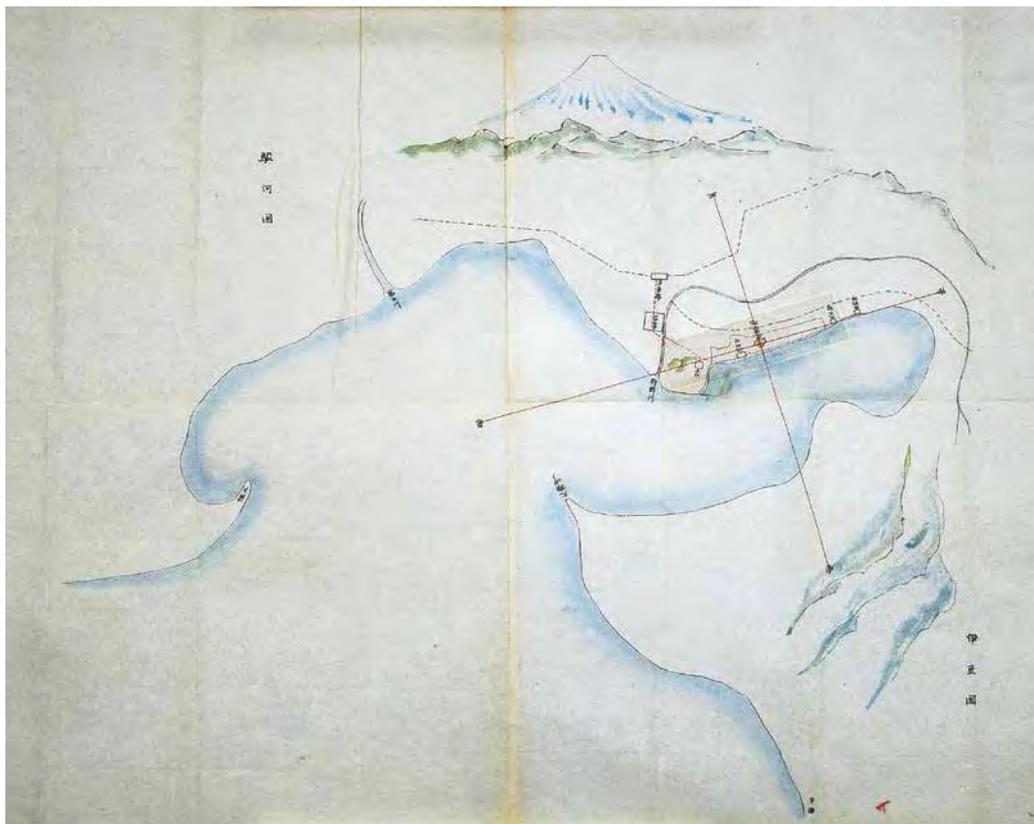
さそわれ

沼津御用邸記念公園開園50周年記念誌



沼津御用邸記念公園開園50周年記念誌





静岡縣沼津近隣地形『内匠寮 明治廿六年 土地建物録』宮内庁宮内公文書館所蔵



私は、少年時代の夏を駿河湾の奥にある沼津で過ごしました。当時の海はきれいに澄んでおり、流し釣りのポンポン船が行き交い、船上で網を引いている人々の声が聞こえてきました。

私はこの海で様々な魚と出会い、魚への理解を深めました。高速で泳ぐソウダガツオが、船の生け簀(す)の中では泳ぎ回ることができず、ただ壁面に打ち当たっていた様が特に印象に残っています。

後年、水族館を訪れ、大型水槽でこのたぐいの魚がのびのびと泳いでいるのを見た時に、この時のことが思い出されました。

〔上皇陛下のおことば〕第21回全国豊かな海づくり大会 H13.10.28 (新焼津漁港)



目 次

上皇陛下のおことば

はじめに 沼津市長 頼重 秀一 …………… 1

巻頭言 旧沼津御用邸苑地の名勝指定とクロマツ林

名城大学名誉教授 丸山 宏 …………… 2

沼津御用邸があったころ

静岡福祉大学名誉教授 小田部雄次 …………… 4

1 沼津御用邸造営以前 …………… 6

2 沼津御用邸の誕生 …………… 12

3 沼津御用邸の造営と経過 …………… 18

寄稿 不思議なご縁 白洲 信哉 …………… 22

沼津御用邸の思い出 明石 元紹 …………… 24

4 沼津御用邸と地域との関わり …………… 28

5 市民の誇りとしての沼津御用邸記念公園 …………… 36

年表 …………… 44

参考文献・引用文献 …………… 48

はじめに



沼津御用邸記念公園を訪れる度に思うことがあります。国道414号から美しく雄大に群生するクロマツ林を抜け、重厚な西附属邸正門を一步入りますと、先ほどまでのまちな喧騒が霧散し、優雅な時の流れにゆっくりと包まれていきます。本市には、歴史的に価値のある場所が様々ございますが、本公園だけが有する特別な雰囲気は、かつて沼津御用邸として使用されていた時代の残り香を感じさせてくれるものであり、市民として誇らしい気分になります。

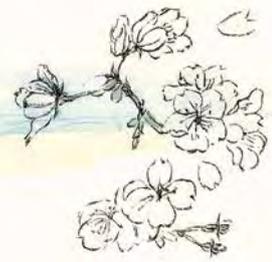
さて、本年は、本公園が都市公園としての開園から、ちょうど50年の節目の年であります。本公園が開園した昭和45年は、沼津市民体育館が完成する3年前であり、現在、新市民体育館建設に向けた計画が進んでいることを考えてみますと、本公園が歩んできた50年という歴史の重みを改めて感じるところであります。

本公園は、昭和44年の沼津御用邸廃止後、昭和45年に都市公園として一般公開され、多くの市民の皆様深く愛されてきました。この50年という長い歴史を振り返ってみますと、昭和46年に第1回目が開催された「菊まつり」を始めとして、「松籟の宴」や「ぬまづ茶会」等、皇室ゆかりの公園としての趣ある雰囲気を生かした様々な催しが開催され、本市の季節を彩る風物詩としての歴史を重ねてきました。また、周辺の我入道公園や島郷海岸とともに散歩コースとして利用され、このような贅沢な空間が日常の風景に溶け込んでいることも、50年の中で育まれた本市ならではのものではないでしょうか。

近年に目を向けてみますと、平成28年に本公園は、クロマツ林やその林間から望む美しい富士山の姿など優れた風致景観を伝え、近代日本における近郊海浜保養地の重要事例であることから、旧沼津御用邸苑地として国の名勝指定を受け、改めてその価値への認識を新たにしたところでもあります。また令和元年には、上皇・上皇后両陛下から本公園のクロマツで製作した「棗（なつめ）」と「炬燵（ろぶち）」が下賜されるという大変光栄な出来事があり、その他にも恩賜箱根公園、三島市立公園楽寿園及び秩父宮記念公園とともに、「富士・箱根・伊豆『皇室ゆかりの庭園』ツーリズム」として、国土交通省によるガーデンツーリズム登録制度の第1号に登録され、本公園の新たな時代の幕開けを感じさせる年となりました。

開園50周年という節目におきまして、本公園を大切にされてきた市民の皆様をはじめとした多くの方々に心から感謝申し上げるとともに、将来にわたって本公園が本市の宝であり続けるよう、市民の皆様とともに守り伝えていくことを改めて誓い、本記念誌の序といたします。

旧沼津御用邸苑地の名勝指定とクロマツ林



名城大学名誉教授 丸山 宏

沼津御用邸記念公園の位置する駿河湾海浜は古くから、クロマツ林が成立していたようである。史実でさかのぼれるのは、16世紀、天正8(1580)年3月、武田勝頼が北条氏政との戦いに先立ち、戦略上不利にならぬよう「千本浦松樹」を切り倒したとある(『沼津雑誌』)。このことから既にこの地域にはクロマツ林が成立していたと推察される。

当初は自然的なクロマツ林であったと思われるが、飛砂や潮風から農地、家屋を守るには経験的にクロマツ林が有効だという先人の知恵が、その後もクロマツの苗木を植え継ぎ、今日にいたっている。この地で植え継いだという事実を明らかにすることはできないが、「千本浦松樹」伐採後の荒廃した地に乗運寺の開山増誉上人が松の苗木を植林したとの伝承が残されているのは留意すべきことかもしれない。

日本各地にある多くの海浜の海岸林は、厳しい自然条件で土壌が形成されない砂地でも生育できるクロマツ林である。クロマツも栄養分のある土壌ではすくすく生長する。しかし、そういう土壌には広葉樹が侵入し、クロマツが駆逐されていく。砂地という貧栄養の環境でも耐えうる樹木がクロマツである。また、厳しい自然条件の中でなんとか生き延びたクロマツは特異な樹形となる。三保の松原のクロマツ林が象徴的である。植え継がれた(植林)という意味では人工的であるが、厳しい環境が作り出した樹形は日本の代表的な風景、風土となる。

この独特の海浜風景の地に、皇太子嘉仁親王(後の大正天皇)の静養ために沼津御用邸が築造される。沼津御用邸の土地は明治22(1889)年に島郷御料地に編入された海岸林の中に設けられた。場所の選定には御用邸からの眺めも考慮されたのであろう。クロマツ林の樹間を通し富士山や牛臥山が眺望できる。御用邸の敷地面積は約2.63ha、本邸の建築は明治25(1892)年末より起工し、翌明治26(1893)年7月に竣工した。

御用邸は離宮ほど豪華な建築ではないが、近代になり皇族のため設定された別邸(別荘)で、明治20年代から避寒、避暑のために栃木、神奈川、静岡の各地に設けられた。

静岡県で最初の御用邸は明治22(1889)年6月に竣工した熱海御用邸(昭和3年廃止、現在、別邸地跡は熱海市役所)で、その次が沼津御用邸である。もう一つ明治33(1900)年4月に竣工した静岡御用邸(昭和5年廃止、現在、別邸地跡は静岡市役所)があった。

皇太子は特に冬期の滞在日数が多く、100日を越える年もあった(例えば明治37年12月4



まるやま・ひろし 1951年京都市生まれ。農学博士。
京都大学大学院農学研究科博士課程単位取得退学、同大助手
を経て1998年名城大学教授。文化庁文化審議会専門委員、日
本造園学会理事などを歴任。旧沼津御用邸苑地保存活用計画
策定委員会委員長を務めた。2020年名城大学名誉教授。

日～明治38年4月14日は141日滞在)。その後も御用邸はよく使用されていたが、太平洋戦争末期の昭和20(1945)年7月の空襲を受け本邸は焼失し、御用邸としての利用はなくなった。昭和44(1969)年に御用邸は廃止され、翌年の昭和45(1970)年、大蔵省(現財務省)から無償貸与され沼津御用邸記念公園が誕生する。現存している東西附属邸は明治期木造宮廷建築として貴重なものである。

沼津御用邸記念公園の開園(昭和45年7月)からほぼ半世紀がたち、公園の枢要部がクロマツ林と林内にある旧沼津御用邸の歴史的遺産が評価され、平成28(2016)年10月に面積約9.5haの名勝旧沼津御用邸苑地として国の文化財に指定された。

ここで「名勝」について少し説明をしておきたい。

文化財保護法が戦後まもない昭和25(1950)年、法隆寺本堂の失火をきっかけに制定された。その前身は大正8(1919)年4月に公布された史蹟名勝天然紀念物保存法である。現在、保存法公布からほぼ100年を経過している。法律制定の背景は、当時、近代産業発展のために工場建設やインフラ整備が急がれ、そのため自然環境や多くの文化財が破壊に瀕し、その反動や反省から保存への危機意識が高まり、保存法が制定された。文化財の保護保存の潮流はイギリス、ドイツ、フランス等海外で先行し、その影響も受けている。当初の保存法でも史蹟、名勝、天然紀念物の指定基準がもうけられていた。現行法では名勝に11の項目がもうけられている。旧沼津御用邸苑地は3の「花樹、草花、紅葉、緑樹などの叢生する場所」と11の「展望地点」である。前者はクロマツ林で、後者は富士山、牛臥山の展望地点としての苑地である。名勝指定地内のクロマツには樹齢200年にも及ぶ巨木も存在する。千本松原と比較するとはるかに高樹齢のクロマツ林である。御用邸で囲われていたことが幸いしていたのではないだろうか。

近代以前から連綿と存続してきた海岸林のクロマツ林と近代に造営された歴史的資産である御用邸が一体となった旧沼津御用邸苑地の名勝指定は、この地の風致的景観に新たな価値を付与するものである。

今後の課題は、クロマツ林存続のための維持管理、それに苑地内にある東西附属邸、本邸跡など御用邸時代の歴史的資産の活用、通常の都市公園の管理とは違う文化財保護の視点が求められる。



沼津御用邸があったころ



静岡福祉大学名誉教授 小田部 雄次

沼津御用邸本邸は、当時皇太子であった大正天皇の御静養先として明治26年(1893)に建てられた。「お雇い外国人」で、日本の医学界の発展に貢献したエルヴィン・ベルツが、皇室や国民の健康のため海水浴、転地療養などを積極的に勧め、沼津がそうした保養地として求められたのであった。

沼津御用邸が建てられた当時の日本は明治維新を経て、新しい近代国家としての道を歩んでおり、その4年前の明治22年には新橋駅から神戸駅までが鉄路で結ばれ、現在の御殿場線経由ながらも東海道線の原型ができ、沼津駅も開業した。沼津駅には旅客駅や貨物駅があり、機関車の車両基地、貨車操車場も設けられた。駅からは沼津港駅までの貨物支線が併設され、駅前には路面電車も停車し、地域の重要拠点となった。

沼津は、もともと東海道五十三次の宿として繁栄していた地域であり、周辺の田子の浦、三保の松原、遠望する富士山などは歌枕の地として知られた。近隣には由緒ある三嶋大社もあった。幕末から維新にかけて、維新の原動力となった薩長の下級武士たちは、京から江戸に向かう途中、沼津周辺の風景を眺めながら、将来、出世したら、この地に別邸を設けたいと願ったともいわれる。

沼津の地は風光明媚だけでなく、冬温く、夏涼しかった。このため御用邸としては珍しく避寒と避暑の両方を兼ねていた。この地に最初に別邸を設けたのは薩摩藩士で陸軍元帥になった元勲の大山巖だった。大山は牛臥山に別邸を建て、さらに朋友の西郷従道にも声をかけた。こうして牛臥から島郷、志下の海岸線に、薩摩藩士で海軍大将となった川村純義や、佐賀藩士で枢密院議長などになった大木喬任らの別邸が建った。そして、これらの別邸と同じ海岸線沿いに沼津御用邸本邸が建てられ、皇室の静養先となった。

また、川村純義は明治天皇皇孫の御養育掛として裕仁親王、雍仁親王らを預かり、沼津の別邸で過ごしたりした。この川村別邸が後に沼津御用邸西付属邸となり、今日に至る。ちなみに、東付属邸は赤坂離宮東宮大夫官舎を移築して、裕仁親王ら皇孫の御学問所としたもので、これも当時の面影を残しながら今日に至っている。



おたべ・ゆうじ 1952年東京都生まれ。
立教大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学。国立国会図書館海外事情調査課非常勤職員、静岡福祉大学社会福祉学部教授などを歴任。専門は日本近現代史。

東西両附属邸の間の広大な敷地は、かつての空襲で焼失した本邸の跡地であり、現在は絵や図面でのみかつての壮大な建物の姿を知ることができるが、再建できなくとも、そのバーチャルな映像が復元されれば、沼津御用邸本邸の壮大さと歴史的価値の大きさを、改めて実感できよう。

明治、大正、昭和の皇族たちは、この広大な御用邸の敷地内のみならず、御用邸の外へも足をのばし、ときに歴代の皇后が多くの子官を引き連れて松林で松露とりなどもしていた。皇孫であった裕仁親王も弟の雍仁親王や宣仁親王、さらには学友たちと牛臥山や香貫山で戦争ごっこをしたり、舟で海に出て大瀬方面に向かったりした。皇孫たちは、近隣の乳牛牧場を訪ねたり、沼津駅を越えて大中寺や原の帯笑園まで出かけたり、駿豆線で三嶋大社に行った帰りに脱線事故にあたりもした。同年代の地元の子どもたちとも交流し、年末に繭玉をもらったり、運動会などを観戦したりした。沼津出身の芹沢光治良は、そうした交流の思い出を書いている。

御用邸の近くには学習院の遊泳場も出来て、歴代の皇族方もここで水泳訓練をした。上皇陛下も沼津の海で泳ぐことが好きであり、『松原遠く消ゆるところ……』という『海』が上皇陛下の愛唱歌であり、沼津の御用邸を思い出すといわれたという。天皇陛下も、愛子内親王も沼津の遊泳場で泳がれた。

沼津市内には御成橋、永代橋、御幸橋、御幸町など、皇室にちなんだ橋名や地名があり、ほかと比べてその数は多い。また、御用邸があった当時の沼津は、保養のみならず東京と関西方面への天皇皇后の移動の際の宿泊地ともなっており、沼津駅で停車中の車内で皇族同士が会見しあったりもした。そして、御用邸があることで、伊藤博文、乃木希典、ベルツはじめ中央の政財界の人々も来訪し、地域の人々の生活の活性化につながった。地域の人々は、御用邸設置の当初から協力的であり、御用邸の建築では木材や石材などを運んだ。

現在、当時の建物が一般公開されている御用邸のうち、御用邸の全体像がわかるのは日光田母沢と沼津の御用邸だけである。この貴重な歴史遺産を守り、継承するのは、わたしたちの役目だろう。



1 沼津御用邸造営以前

約260年続いた江戸時代から、天皇を中心とした中央集権国家になった明治時代になると、天皇をはじめとした皇室の静養滞在所として「御用邸」が各地に建てられていった。数ある場所の中から沼津が選ばれた理由はどこにあったのか。それを知り得るために、沼津という場所の成り立ちや魅力から見てみたい。

川湊から宿場町、城下町へ

沼津は狩野川の川湊として発達したのが街のはじまりで、その後、天正7年(1579)に武田勝頼が築城した三枚橋城は、甲斐武田氏の駿河における拠点の1つであった。

徳川家康は、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いに勝利するとすぐに東海道の宿駅を定めた。これは幕府を開く前のことで、いかに交通政策の重要性を認識していたかが伺える。沼津宿も宿駅に定められ、宿場町として発展した。その後、安永6年(1777)の水野忠友による沼津藩の成立により、城下町として発展した。このように、江戸時代に都市としての基盤が形成されたといえる。

狩野川と海岸の松林

図1は、尾張藩士・高力猿猴庵が東海道を旅して描いた絵図『東街便覧図略』(*1)のうちの「河曲輪」と題した沼津の風景である。

東海道を沿って西へ流れる狩野川は、やがて大きく湾曲し南へ向かい駿河湾に注ぐ。絵は、現在の三園橋付近の街道から左岸を眺めた図だろうか。街道には松が植えられ、狩野川には漁舟と



図1 『東街便覧図略』のうち「河曲輪」高力猿猴庵 寛政7年(1795)(*1)
河曲輪は川廓とも書き、狩野川に隣接する沼津城の外郭として軍事的役割をもっていた。

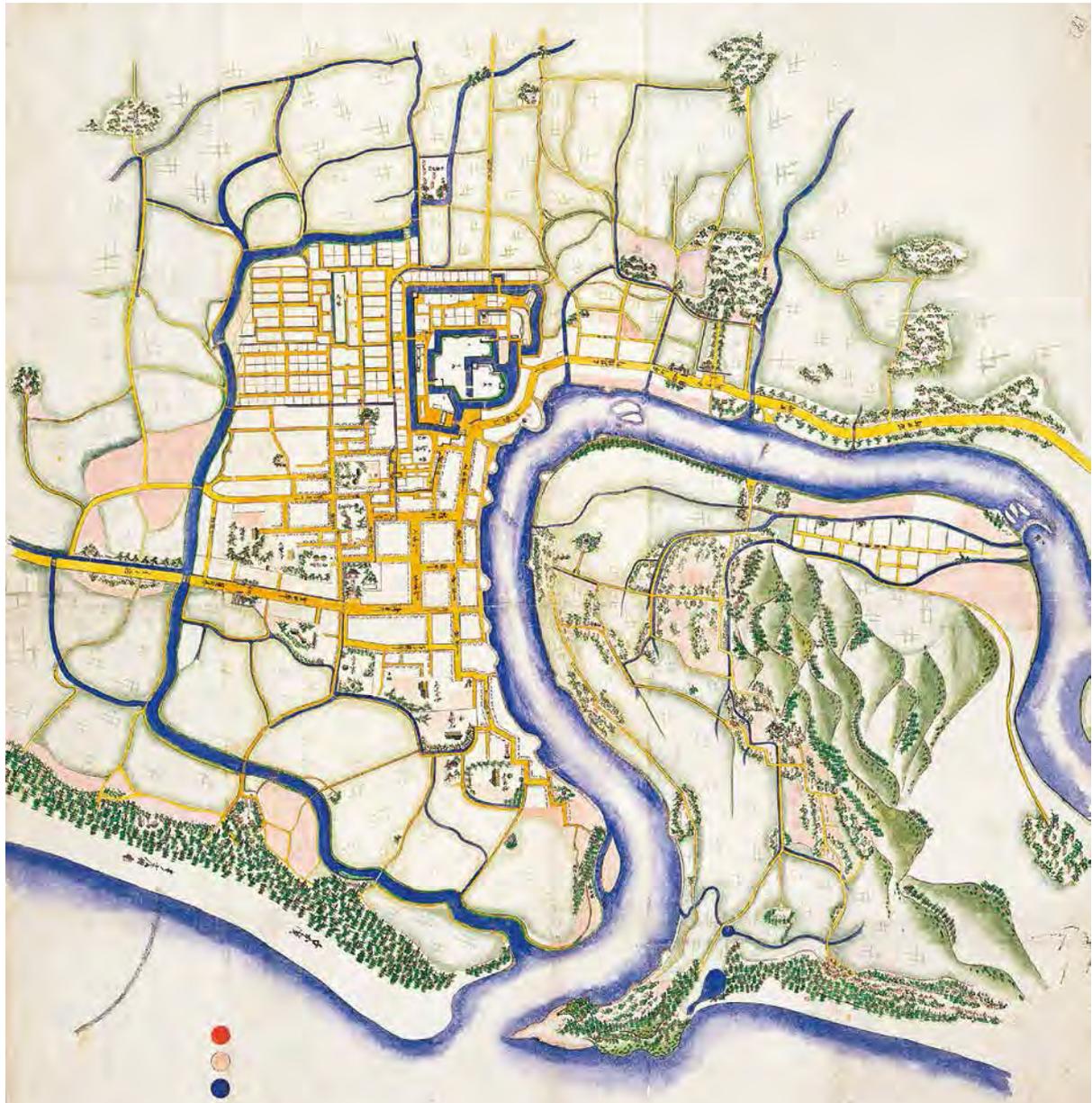


図2 沼津城周辺図(*2) 江戸時代末頃 (沼津市立図書館所蔵)

おぼしき舟が行き来している。対岸に見える山は香貫山であろう。沼津城の外堀に沿う街道と狩野川、そして山の姿が日常の風景として特徴的にとらえられている。

図2は幕末期に描かれたものだが、沼津城を中心に狩野川に沿って東海道が走り、左岸一帯の香貫や我入道の村々を包み込むように狩野川が大きく湾曲している。狩野川へ注ぎ込む中小の河川や用水の流れなどをうかがうことができる。

狩野川の川岸のところをよく見ると、コブのようなものがいくつか描かれている。右岸に多く9箇所、左岸に4箇所ある。沼津城の本丸に近い箇所が一番大きく描かれている。これは「出し」といって、石積みで造られた船着き場だったのである。川湊として発達した沼津を読みとることができる。

海岸には松林が連続し、千本松原を形成している。河口の我入道から東へと松林は延びている。後に沼津御用邸が位置する松林の東側に集落が描かれ、小さく「桃郷」と書かれている。御用邸が位置する場所は現在「島郷」であるが、地名がいくつか変遷している。

狩野川河口左岸にある牛臥山は、その昔、島であったといわれる。島郷はその東に位置するが、東の方が大きな入り江になっていたことから、島の入り江に面した土地ということで、島江（とうごう）と称されていた。その後土地が干拓され、入り江がなくなっていったので、江を郷に代え島郷と称するようになった(*3)という。

江戸時代後期には桃の栽培が盛んになって、島の字を桃に代え、桃郷と書かれた。この桃郷という表記は明治時代になっても多く使われ、大正、昭和の時代でも地域の様々な組織の名称には桃郷消防団、桃郷青年会、桃郷部農会など、桃郷の文字が盛んに使われていた。しかし行政上の文書には、ずっと島郷と書かれていたようである。昭和7年(1932)8月に当該地域の耕地整理が施行され、字区域の名称変更がなされてからは、島郷を正式名称として地域住民も使うようになった(*4)。

島郷の海岸一帯に広がる松林は、記録では延宝元年(1673)、幕府の御林（管理林）になったとされている。この松林が防風林となり、冬の冷たい西風を防いでいたので、その東側は温暖で穏やかな気候となり、潮風の強い地域であるにもかかわらず桃の栽培が可能になったのである。

静養滞在場所としての条件

図3は、明治24年(1891)の「駿河国駿東郡沼津町畧圖」(*5)である。狩野川左岸の楊原村を含んだ絵図となっており、沼津町と楊原村が地理的にも経済的にも一体であることを示しているといえる。

東海道線は明治22年に開通し、沼津駅も開設された。東海道線の敷設に先立ち、狩野川河口から沼津駅まで蛇松線を引き、ここからこの地域一帯の線路敷設の資材が搬入されたのである。この東海道線の開通は地域経済をはじめ地域の発展に大きく寄与したとともに、この地域が明治政府高官たちの別荘地として選ばれることにつながった。図3に示すように4人の伯爵、すなわち大山巖（陸軍大臣）の別荘を皮切りに、西郷従道（陸・海軍大臣）、川村純義（海軍卿）、そして



沼津御用邸造営当時の海岸の風景（宮内庁書陵部所蔵）

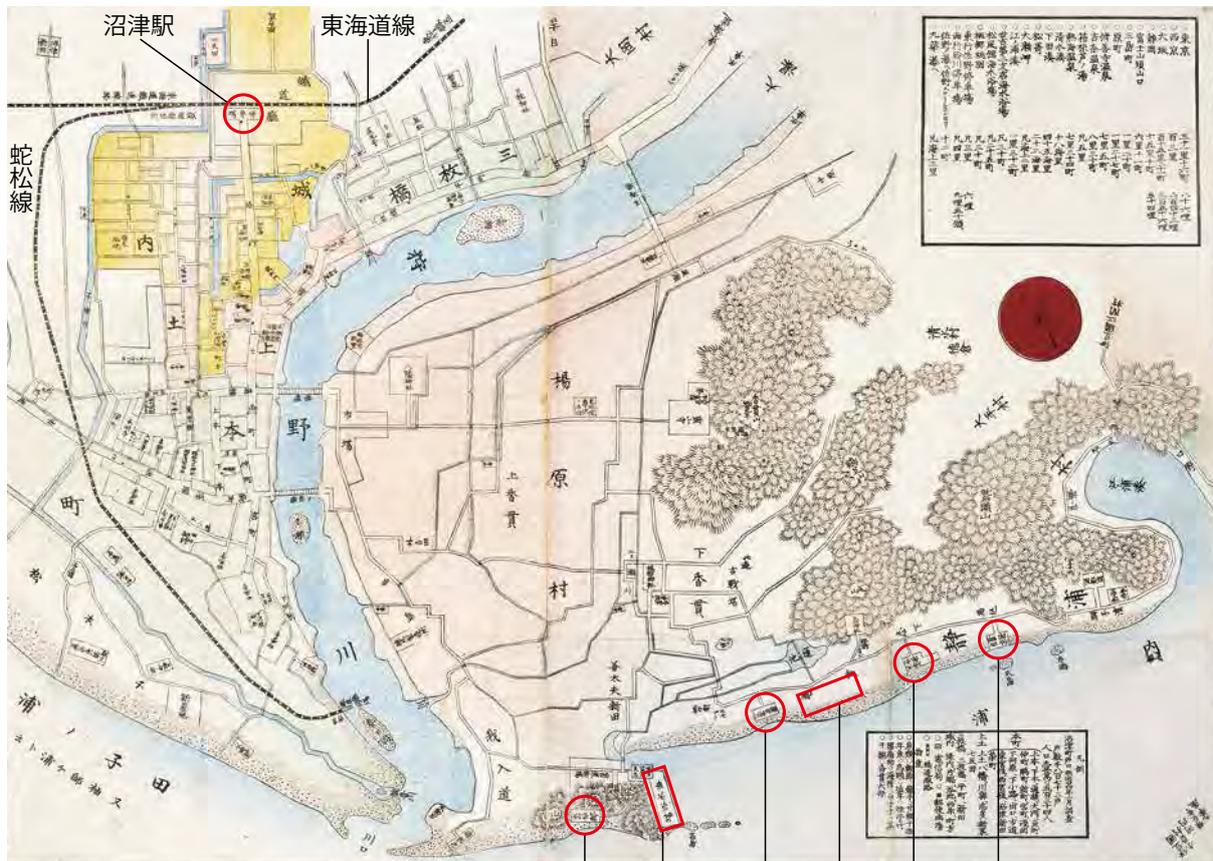


図3 駿河国駿東郡沼津町畧圖
明治24年(1891) (沼津市明治史料館所蔵)

- 大山巖伯爵別荘
- 川村純義伯爵別荘
- 大木喬任伯爵別荘
- 西郷従道伯爵別荘
- 海水浴場
- 後の沼津御用邸位置

大山巖は明治20年に土地を購入、西郷従道は大山の勧めで別荘を建てた。川村純義は西郷と親戚関係にあった。3人は薩摩藩出身で、これに佐賀藩出身の大木喬任も別荘を構えた。その後御用邸が造られるが、4人の存在は大きく影響したと思われる。

大木喬任（文部大臣）の別荘が相次いで建てられたのである。これはその後楊原村に御用邸が造営される契機と考えるとよいであろう。

御用邸は天皇をはじめとした皇室の静養滞在所である。そのための場所を選定するに当たっては、立地条件が重視されたのは当然のことであった。御用邸の設置に先立ち、宮内省では一定の環境調査をしたようである。一つには気温調査である。沼津と東京を比較すると、(いずれも華氏)平均気温は10月2.7度、11月3.2度、12月4.1度、1月4度、沼津のほうが暖かかった。この間の最高気温でも平均すると沼津が3度高く、最低気温では東京が3度前後低かった。これは東京に比べて冬は暖かいことを示しており、避寒に適する場所であることが明らかとなった。

また、食べ物、特に魚の新鮮さは、他の地域に比類ないほどの好環境である。日本一深い駿河湾からはいつも豊富で新鮮な魚を用意できたし、陸に目を向けると香貫地域の野菜が季節を通じ

て豊富に提供できた。

さらに、富士山の南麓に位置するこの地域は、富士山に降った雨や雪解け水によって、豊富な地下水や湧水に恵まれていた。

このように沼津市には気温、食べ物、水の三拍子がそろって、環境の条件がクリアされたと思われる。（*6）

御用邸と近隣住民

島郷の海岸に広がる松林は、江戸時代に幕府の管理となったが、明治政府が樹立されると、それまでの官林は明治23年頃に農商務省、内務省から宮内省に移管され、「御料林」となった。およそ21町歩（約21万㎡）の広さを有していたが、そのうち71%の15町歩を御用邸建設の用地とした。

明治25年(1892)12月10日、宮内省内事課長は駿東郡長に対して、次のような通達を出した。

「静岡県楊原村下香貫島郷地内の御料林内に御用邸の建設が決まった。については近傍の住民などから苦情が出ると不都合なので、浜辺の網小屋一箇所は他に適当な地所を貸し与えて移転することになっているが、そのことも含めて村民の感情を調べ、至急回答してほしい。」(*6)

これを受けて楊原村長奈良橋儀八は、次のように楊原村の事情を回答した。

- ① 御用邸の建設に対して苦情などはありません。
- ② 建設にあたっては地元民は労力の提供を準備しています。
- ③ 決定通り建設していただければ、この上なく幸せです。
- ④ 御用邸への入り口は村の端の島郷字入口より、直線で敷設されることを希望します。
- ⑤ 浜の網小屋の移転先は東側を希望します。（*6）

12月15日に宮内省は楊原村を訪れ、奈良橋村長などから直接事情を聴取するという念入りな地元の意向把握に努めた。漁業の営業や網小屋の移転についてなど率直な話しのやり取りができたようで、村民を交えた村会の了解事項を村の返事として伝えたという。



松林越しの富士山：沼津御用邸記念公園に面した海岸から望む

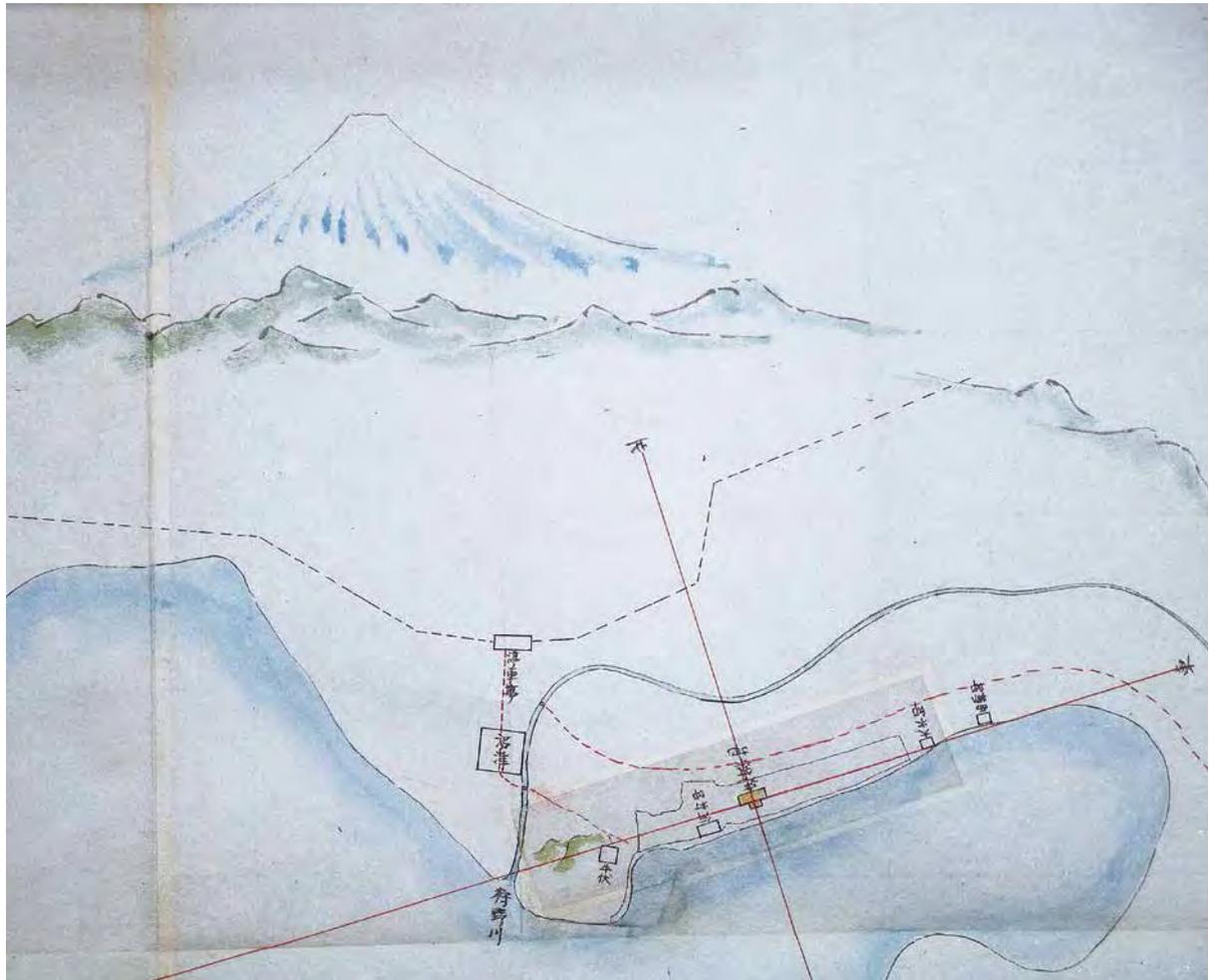


図4 静岡県沼津近隣地形（部分）『内匠寮 明治廿六年 土地建物録』宮内庁宮内公文書館所蔵

その後、島郷の住民は山本熊次郎他76名連名で労力の提供を「献納願」というかたちで宮内大臣宛に申し出ている。建設工事が始まると村民は石の運搬、庭木の手入れ、清掃などの仕事に従事したという。（*4）

富士山を望む雄大で優れた景観の地

図4（全体図は口絵参照）は明治26年(1893)に宮内省内匠寮が描いた沼津御用邸の場所を示す絵図である。富士山を北に望む位置にあり、伊豆半島西北端の大瀬崎が大きく張り出して描かれ、入り江の入り口にある島郷の海岸が穏やかであるかのような強調した位置関係となっているが、眺望に勝れた土地が選ばれていたことは理解できる。

これまで見てきた立地の条件をまとめると、海岸に面して広く敷地がとれること、雄大で優れた景観の場所であること、気候温暖で冬暖かい避寒の地であること、そして、新鮮で豊かな海産物や農産物がとれ、おいしい水が豊富にあるという食の条件を満足しているということである。

2 沼津御用邸の誕生

御用邸と離宮

御用邸とよく似た存在として、離宮がある。「御用邸」は、天皇をはじめとした皇室の静養滞在所として地方の各地に建てられていった、いわば「別荘」であるといえる。一方「離宮」は、皇居や王宮以外の場所に設けられた「宮殿」であった。離宮は保養のほかに国賓の宿泊や接待を供する公的行事も行うことができる場所と位置付けられることに対して、御用邸の使用目的に公的行事は含まれず、専ら皇室の保養の場所とされた。

このような御用邸と離宮の違いのなかで、もう一つ大きく異なることがある。それは離宮は、明治時代より前から存在するということに対して、御用邸は明治に入って制度としてできたものであるということである。

したがって、天皇を中心とした中央集権体制の新しい時代において、新しい制度としての御用邸を各地に造営していくことは、地政学的な意味があったといえる。

離宮・御用邸設置の地政学的意味

表1は、離宮と御用邸の成立時期、立地の型、及び明治以前の体制との関係を示したものである。この表から理解できることは、離宮・御用邸の成立は、東京の賓客接待型、次に京都の庭園鑑賞型、続いて地方都市のリゾート型や宿泊拠点型となる。これは明治政府が、離宮・御用邸の存在を国民意識の形成に役立つと考え、先ず「両京」と称して重要視していた東京と京都をおさえ、その後、地方都市を固めていったと解釈できる。

また、離宮・御用邸の設置は、旧政府である徳川家・徳川幕府と深い関わりがあることがわかる。初めての対外戦争である日清戦争が始まる明治27年(1894)以前に成立したものは、すべて徳川家・徳川幕府と強い関係やゆかりの場所となっている(*8)。

この徳川家との関係を明示する記録は見当たらないが、上記の事実的対応を見れば、離宮・御用邸の設置位置を旧政権・徳川ゆかりの地に定め、イメージの置き換えをおこなったのではないかと考えられる。

海のリゾートとしての沼津御用邸

ここで沼津御用邸に注目したい。沼津御用邸の成立は明治26年(1893)であり、日清戦争の前年である。先に見たように、それまでの離宮・御用邸はすべて徳川家・徳川幕府と深い関わりがあ



静岡御用邸（静岡県立中央図書館所蔵）



熱海御用邸（宮内庁書陵部所蔵）

表1 離宮・御用邸の成立時期と立地の型、及び徳川家・徳川幕府との関係

成立	離宮	御用邸	立地の型	徳川家・徳川幕府との関係	廃止
M 3	浜離宮		賓客接待型	将軍家の獵場	S 20
M 5	赤坂離宮		賓客接待型	徳川御三家の紀伊藩の屋敷	S 23
M 9	芝離宮		賓客接待型	徳川御三家の紀伊藩の下屋敷	T 13
M16	桂離宮		庭園鑑賞型	徳川家と縁の深い宮家の別荘	○
M17	修学院離宮		庭園鑑賞型	徳川家と縁の深い宮家の別荘	○
M17	二条離宮		宿泊拠点型	徳川家の京都の居城	S 14
M19	箱根離宮		リゾート型	箱根関所	T 12
M21		熱海御用邸	リゾート型	徳川家光の湯治場	S 6
M23		伊香保御用邸	リゾート型	伊香保関所	S 20
M26	名古屋離宮		宿泊拠点型	徳川御三家の尾張藩の天守閣	S 20
M26		日光山内御用邸	リゾート型	徳川家の霊廟の日光東照宮	S 35
M26		沼津御用邸	リゾート型	徳川家が開校した沼津兵学校	S 44
M27		葉山御用邸	リゾート型		○
M28		宮の下御用邸	リゾート型		S 8
M31		神戸御用邸	宿泊拠点型		M40
M32		田母沢御用邸	リゾート型	東照宮のあった日光	S 20
M32		鎌倉御用邸	リゾート型		S 6
M33		静岡御用邸	宿泊拠点型	徳川家の菩提寺の久能山	S 5
M34		小田原御用邸	リゾート型		S 5
M37		塩原御用邸	リゾート型		S 20
M37	霞ヶ関離宮		賓客接待型		S 20
M41	武庫離宮		宿泊拠点型		S 20
T 15		那須御用邸	リゾート型		○
S 43		須崎御用邸	リゾート型		○

初めての対外戦争である日清戦争が始まる明治27年以前以後に注目する

○は存続を示す。

り、沼津においても明治初年、沼津兵学校が徳川家によって設立されている。沼津兵学校は260年余にわたって日本の政権を担ってきた徳川家が設立者であり、明治政府をはるかにしのぐ優れた教授陣や教育内容を誇っていたことを考えると、それ以前に造られてきた離宮・御用邸の流れの一つの区切りとして沼津御用邸があるといえる。

そしてリゾート型の中でも、設置の場所は海岸沿いの松林の中にあり、“海のリゾート”の最初であるといえる。日本における海水浴場は、明治18年(1885)に神奈川県大磯に開設されたのが最初といわれ、大磯は明治20年に鉄道が開通すると海水浴客で賑わうようになったという。大磯の例もあって、沼津でも鉄道開通の前年、明治21年に千本浜と牛臥海岸に海水浴場が開設された。図3の明治24年地図にはすでに牛臥海岸に「海水浴場」の表示がある。

このように沼津御用邸は、立地場所から見たリゾート型として海沿いに位置する初めての御用邸だったといえる。

なお、現在も存続している御用邸は、葉山、那須、須崎の3邸である。

沼津御用邸の成立と本邸の造営

沼津市が所蔵する明治25年(1892)11月の沼津御用邸新築仕様書をみると、同じ明治25年11月の日付で「沼津御用邸新築に付御座所向築造軸方仕様注文書」というものがあり、記録の上でこれが工事開始を示すものである。

宮内庁の工事録に明治25年12月の記録として「沼津御用邸新築に付猿江出張所より沼津御料地まで木材運搬云々」というものが残されている。猿江出張所とは今の東京都江東区深川の木場にあった貯木所であり、御用邸建設にあたって、その材料の一部を深川木場から運んだらしい。また12月には、敷地周りの土台石垣を江ノ浦の間知石を指定して注文している。

これらの記録から少なくとも明治25年の暮れには、370坪あまりの建物の建築が始まったと考えられる(*6)。

沼津御用邸の本邸は、明治26年7月に竣工した。この段階では、建築面積は全体の1/3程度で、御座所を中心とした旧御殿といわれる部分だけであったが、御用邸としての機能は備えていた。

明治28年9月には最初の増築が始まり、新しい御座所、臣下詰所、侍医詰所、女官室などが整えられた。御座所はおよそ100坪増築され、新旧二つの御殿となった。この段階では、建築面積も全体の2/3程度となり、御用邸としての機能の充実が図られた。また牛舎や厩舎などの附属建物も次第に整備され、馬場も新設された。

明治33年になると車寄、湯殿、厠、女官便所など260坪ほどの増築があった。また表御座所のある洋館が新築された。この段階で、建築面積も全体に近い約5千㎡となり、ほぼ完成された形となった。

建築史に残る本邸の洋館

明治33年(1900)5月に皇太子殿下(後の大正天皇)のご成婚があり、翌34年10月に御学問所として、木造平屋建ての洋館が竣工した。これは皇太子殿下ご成婚の記念的建物と推察される(*7)。当時の御用邸としては初めての洋風建築で、ご新婚生活にふさわしい華やかさを感じさせるものであった。

本邸写真1～9(識別番号46855「熱海御用邸・沼津御用邸(写真帳)」)宮内庁公文書館所蔵



1 正門



2 正門より御車寄に至る通路

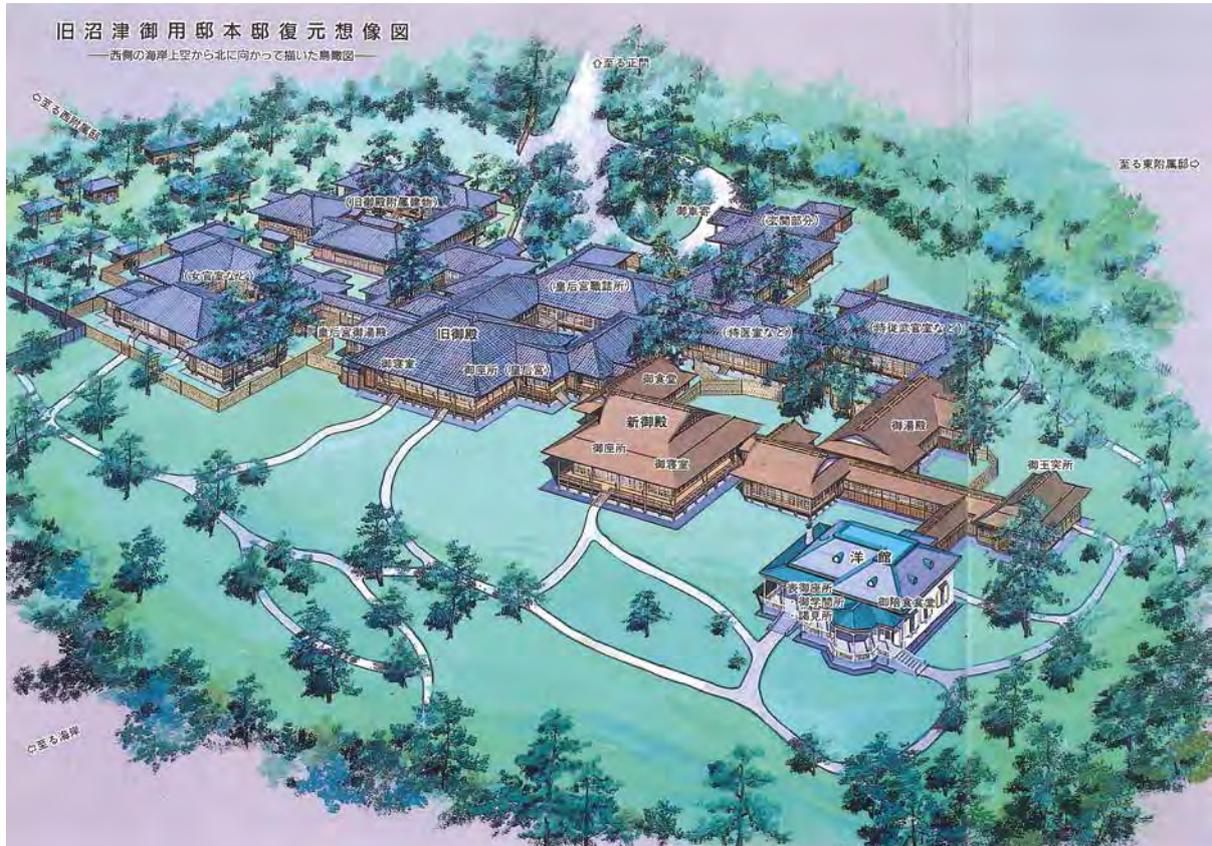


図5 沼津御用邸本邸復元想像図(*9)

設計には片山東熊が従事している。片山は赤坂離宮をはじめとする当時の代表的な西洋建築の設計などで知られる高名な建築家である。建築面積70坪の洋館は、御書齋、御食堂と臣下室のみであるが、三室とも暖炉が設けられ、家具や内装も洋館に合った高級感があるものとなっている。御食堂の南側にはバルコニーが付設され、御陪食食堂として用いられた。片山がアメリカから帰った直後の作品であるため、バルコニーや外壁の下見板にアメリカ住宅の影響が見られる(*7)。

小規模ながら明治後期における宮廷建築の一つの事例として、建築史に残る建物であった。



3 旧御殿（皇后宮御座所、御寝室）



4 新御殿（御座所、御寝室）

建物全体配置の考え方

本邸は、明治26年の新築以来、数回の増改築を行った結果、建築面積が約5750㎡となり、百を超える部屋を備えることになった。木造平屋建ての建築群が廊下でつながるといふ大規模建築が出現したのである。

建築群は東から西に連なっており、東端に洋館があり、その北に御玉突所が和館の別棟として移築されている。建築群全体の配置について、建物の軸線を海岸線と並行とはせず、南南西に振っている。これは海岸線が南西に面しているので、建物をできるだけ南面させるため考えられた配置計画となっている。



5 東南側から見た本邸洋館の外観

外壁は下見板張り、屋根はスレート葺きで、外観は全体にルネサンス様式を基調にまとめられている。内部は、床は寄木張り、腰は羽目板張り、壁・天井は漆喰塗り仕上げである。

建築資材と職人

木材を深川木場から運んだという記録が残されているが、すべてが木場から運ばれたということではなく、いくらかは沼津周辺の現地で調達しているという。松丸太などの木材の調達は沼津町本町の業者が行っていた。

建築群が広く大規模であったから、多くの様々な職人たちが必要であった。大工をはじめ石工、植木屋、屋根葺き、畳職人、経師屋、塗師、建具屋、左官、画工、泥工、金物屋、ガラス屋など



6 御車寄と玄関部分



7 御文庫其他附属建物

の職人たちが沼津内外から集められた。沼津垣を編む職人も建設工事に参加した。

保養の地としてふさわしい場所

本邸は明治26年7月15日に竣工した。直後の7月23日午前10時30分、皇太子殿下（大正天皇）は沼津駅に到着され、専用的人力車で御用邸に入られた。

「沼津町では3か所に緑門が造られ、21発の煙火が打ち上げられた。駅から湊橋（現御成橋）までは人垣が屏風のように続き、湊橋を渡ると香貫の有志家数百名が整列して出迎えた。沿道にも奉迎の人が集まり、露店が数か所で店を開いた。桃郷の入口では小学生が整列して君が代を斉唱した。この日の沼津は夜になっても賑わい、お祭りのようであったという。」(*10)

到着された日の午後に皇太子殿下と学友らは海水浴をされた。海浜には休息所二棟が設けられ、一棟は菊の御紋の紫の幕が張られた。皇太子殿下は初めての行啓で8月20日までの29日間、滞在された。

その後、毎年のように行啓され、皇太子時代は延べ1022日を数える。大正天皇になられてからは大正10年からの4年間に限られ、延べ334日の滞在であった。最も滞在日数が多かったことは、病弱であられた大正天皇にとって保養の地としてふさわしい場所だったといえるのではないだろうか。



8 御馬見所



9 馬車舎及厩舎

3 沼津御用邸の造営と経過

旧沼津御用邸成立経過概念図（沼津市教育委員会「旧沼津御用邸調査報告書」平成28年(2016)）



図6 明治26年(1893)頃

図6は本邸が竣工した明治26年(1893)の御用邸全体配置図である。本邸は増改築が進められ、明治33年にはほぼ完成された形となった。図7は完成形の状況を示している。

東附属邸の造営

明治35年(1902)、川村純義が迪宮裕仁親王（昭和天皇、当時1歳）の養育係を命ぜられたことから、沼津御用邸西隣にあった川村の別邸に親王が長期間滞在することになった。明治36年4月、宮内省は赤坂離宮の東宮大夫官舎を沼津御用邸本邸の東隣に移築し、約550㎡の東附属邸として造営された。

東附属邸は御学問所として設置したものであり、常住のための建物ではなく、臨時的な使用が中心だったと思われる。

東附属邸の東隣には学習院の游泳場が設けられており、皇孫殿下（昭和天皇、秩父宮）が在学



図7 明治36年(1903)頃



図8 大正11年(1922)頃

中のは、夏季のご利用の機会も多く、東附属邸の裏門から游泳場へ向かわれたという。

西附属邸の造営

昭和天皇は出生した明治34年(1901)の翌年から、養育係の川村純義の別邸で夏冬を過ごした。明治38年8月、本邸の西隣にあった川村の別邸を買い取り西附属邸とした。こうして皇孫殿下の御用邸となったわけだが、実際にはそれ以前から御用邸としての役割を果たしていたのである。

昭和天皇にとって沼津御用邸は、幼少期から学び育った場所として馴染みの地であった(川村による養育は3歳までだったが)。西附属邸となった後も、よくそこを使い、周囲の海や自然に親しんだ。周辺にいた同年配の子供たちと相撲をとったこともあったという(*11)。

明治39年6月に宮城内の賢所附属建物を移築、明治41年7月に御車寄や御湯殿を増築、大正11年(1922)7月には御玉突所を増築し、全体面積約1270㎡の西附属邸が完成した。



図9 昭和44年(1969)頃



図10 歌川広重「東海道五十三次 沼津」行書版



東附属邸御殿臣下昇降口付近の沼津垣
(宮内庁書陵部所蔵)

御用邸に電気が点いた

島郷周辺に電気が初めてひかれたのは、古老の記憶では大正3年(1914)頃のことのようである。御用邸に電灯が点いたのは、その少し前、明治45年(1912)であったという記録がある(*12)。それによると御用邸の屋内線の工事を請け負ったのは、東京の業者であった。それは非常に嚴重な仕様で、普通の住宅の屋内線は600V用の電線を使っていたが、御用邸は3000V用のゴム線だった。

沼津垣の利用と効用

沼津は南西からの風が強い。沼津垣は、その強風と海岸からの砂を防ぎ、家や農作物を守るために江戸時代以前から作られ続け、利用されてきた。図10は歌川広重の東海道五十三次・沼津(行書版)に沼津垣が描かれている。

右上の写真に見られるように、本邸や附属邸の建物を囲むように沼津垣が利用されてきた。沼津垣は、沼津周辺の山に自生する箱根竹といわれる直径1cmほどの細い篠竹で作られる。16本に束ねた篠竹を交互に斜めに重ねて、杉綾模様に編み込んでいく。全体的に二重となるため、潮風や砂を防ぐのに適しているのである。



馬場



防空壕

不思議なご縁



白洲次郎の父、文平。昭和十年没なので生前知る由もないが、大分県竹田の市長から、萩村に文平氏終の住処が残っているので遊びにきませんか？とお誘いを受けたことがある。以後身近に感じ、兵庫県三田わが家代々の墓参りの折には、線香を焼べるようになった。

この度、頼重秀一市長との対談の話しが持ち上がり、川村純義、と聞いて文平以上に？マークだった。コロナ禍緊急事態宣言直前、その対談が開催されたのであるが、旅の供に「白洲正子自伝」を携え湘南電車に乗車する。冒頭の津本陽『薩摩示現流』に、学生時代祖母との旅で、示現流道場の熱気や桜島に開聞岳の美しさがまざまざと浮かび上がってくる。二章「ふたりの祖父」には、本主題の川村純義が登場するのだが、父方の樺山資紀の長男愛輔と川村の娘常子、つまり祖母の両親の結婚を、海軍二つの勢力和解の象徴と記しているのが興味深かった。そして、むやみに飛び回る「韋駄天」気質は川村から、精神的には樺山の祖父の影響が大きかったとある。時折僕も、次郎に、また小林によく似ていると、目上のかたから聞かされてきたが、仕事は正子から多くを受け継いだと思っている。

自伝には、川村は海軍を去った後、昭和天皇とその弟の秩父宮殿下の養育係とあり、常子は、沼津への行幸の折に歌を残している。「日の御子がうづの御手に御籠もたし 春の大野に葉草つます」。富士の裾野御殿場にあった樺山邸にも、富士登山の折に昭和天皇がお立ち寄りになった写真が自伝に掲載されているが、親友であった秩父宮妃殿下も度々登場する。僕は、再び学生時代の、赤坂御所内豊川稲荷裏にある秩父宮邸に二度、同行した記憶が蘇ってきた。



西附属邸中庭

小学校時代からの同級生は、昨日の会話の続きでもしているかのように、御殿場や米国での思い出に尽きる事はなかった。

さて、沼津御用邸記念公園は、昨秋に続いて二度目だったが、自伝の予備知識もあり親しみが増してきた。御用邸公園は、手入れの行き届いた松林をバックに、急峻なる富士が浮かび上がり、ユニークな沼津垣に、かつてのビリヤード場など、明治の面影を偲ぶ舞台装置の宝庫である。僕は、さきの文平のように、それ以前の先祖のことなど考えてみたことなどなかったが、これを機に川村の墓参もと思っている。軍服を纏った両曾祖父のスマートながらもスサマジイお姿と、御用邸公園や、隣家の学習院夏校舎の佇まいに、明治時代の英才教育を憶う。

だが、歴史は記憶するだけではダメだ。僕は普段戦国時代の酒器に親しんでいるのも、歴史とモノとが交わることにより、時代の面影を身近に感じることが出来るからだ。茶碗は、お抹茶を飲む道具であり、国宝であろうが重文であろうが、展示するだけでは本末転倒だ。歴史的建造物も然りだと日頃より強く思ってきたが、五十周年を機に御用邸公園が、明治遺産の現在進行形として生まれ変わることを切に願っている。

〈白洲信哉氏（しらす・しんや）文筆家。1965年東京都生まれ。細川護熙首相の公設秘書を経て、執筆活動に入る。その一方で日本文化の普及につとめ、書籍編集、デザインのほか、さまざまな文化イベントをプロデュースしている。父方の祖父母は、白洲次郎・正子。母方の祖父は文芸評論家の小林秀雄。白洲正子の母方の祖父にあたる川村純義伯爵は、皇孫殿下（昭和天皇）のご養育係であり、かつての川村伯爵別荘は現在の沼津御用邸西附属邸の一部となっている。〉



2020年3月28日、沼津御用邸に深い由縁をもつ白洲信哉氏（左）と頼重秀一沼津市長（右）の対談会が沼津御用邸記念公園で開催された。

沼津御用邸の思い出



上皇陛下の同級生

私は、大正時代に台湾総督をした陸軍大将 明石元二郎の長男・明石元長のまた長男・元紹（モトツグ）として昭和9年(1934)1月に東京に生まれた。祖父元二郎は台湾総督のため男爵を授けられたので、父元長は貴族院議員を務め、私は幼少時女子学習院幼稚園に入園、その頃からいまの上皇陛下（明仁親王殿下）の同級生として光栄を拝することになる。

これから書く沼津御用邸の思い出は、大東亜戦争の戦時下、戦後のまだ東宮時代の学友としての思い出である。

私ども幼稚園児は、週2回ほど赤坂迎賓館に連れて行かれ、明仁親王の遊び相手をしておりました。それが昭和15年(1940)4月に学習院初等科に入学し、同時に外部から37人の男児が加わり、同級生は68人となり、東組、西組に分かれた。

昭和16年12月8日、2年生のとき大東亜戦争が始まる。でも日本国民、特にわれわれの生活は穏やかな時代だった。学校の授業も順調に進んだ。ただ明仁親王の社会勉強のためか、企業、神社仏閣、軍の機関への見学が異常に多かったのが記憶されており、学生は必ず感想文（綴り方）を書かされた。

昭和18年夏、赤禪で水泳演習

4年生の夏、昭和18年、学習院伝統の沼津での夏季水泳演習に参加する学年になった。しかし振り返ると、戦争のため且つて乃木希典院長がつくり上げた質素剛健な鍛錬を目的とした水泳演習の最後となった。

沼津島郷にある合宿所は、ほとんど吹き通しの質素な建物で、子供たちは松林を抜けて、そのまま海岸に飛び出せるし、浜は隣りが御用邸である。私どもは7月19日から8日間ほぼ全員が参加した。

ところで、明仁親王の入学に際して学習院は海軍予備役の山梨勝之進海軍大将を院長に迎えた。この院長の存在が戦中戦後を通じて、どれくらいの幸せをわれわれに与えてくださったか分からない。山梨さんは第1次世界大戦の前に軍艦調達のために永くロンドンに滞在し、イギリス人の気質や英国から見る世界の存分を知っていた。戦争中は国が戦う以上、胸の内

夏休みで沼津に来られ、愛犬を連れて海辺を散歩される皇太子時代の上皇陛下（昭和21年7月17日）
〈中日新聞社提供〉



に秘めておられたが、不味い戦争を日本がやったことを悔いていた。しかも予備役に廻されたのは軍縮会議で日本の代表の一人として軍縮に賛成したためだった。上皇陛下は今でも山梨院長の存在を感謝しておられる。

話しを戻すと、われわれ4年の水泳演習に山梨院長は率先して参加し、明仁親王（当時皇太子殿下）は浜を歩いて御用邸から毎日参加した。初めての赤禪姿でした。学習院では「赤ブン」と呼び、昔は鮫よけの赤色だったが、今は鮫などいない。このころの殿下は山田康彦伝育官などの努力で、ひと際赤黒く健康そうな体になっていた。

山田康彦さん（のちの東宮侍従長）にふれたい。当時の伝育官は明仁親王の将来を思って、みんな真剣で厳しかった。東園基文、村井長正など体格のいい、白人に見劣りしない大元帥をめざして幼い殿下を叱咤激励していた。そんななかで山田さんは穏やかだった。芯は強い方だと思うが、明仁親王には優しく見えた。「ヤマ、ヤマ」と甘えたその山田さんが水泳の指導に熱心だった。

学習院の水泳の師範は、小堀流の権威・猿木恭経中等科教授が当たった（この猿木先生は中等科でわれわれの主管になる）。

4年の子供たちは泳げる者、はじめての者とまちまち、平泳ぎだが帽子の色分けで先生がすぐ解るようになっていた。私はゼロからのスタートで、やっと1級上がったところで終わった。殿下は山田伝育官の指導で、もう充分泳げた。海での平泳ぎは泳ぐことを覚えると、気力次第で遠泳もできるようになる。殿下はもうトップスイマーだった。

私はこの水泳の自信が殿下の気持ちに大きな変化を与えたと推測する。四谷の学校のと違って、クラスメイトより優れた自分を発見した。明るく積極性が出て、我慢することを覚えた。もうひとつ水泳が教えてくれたのは忍耐力である。気力と我慢でそれだけ距離が延びた。

中等科になってからと思うが、遠泳で淡島を廻ってこられた。この遠泳で憶えた哲学が、のちの正規の競技会などで発揮され、テニスや馬術も明仁親王のトレードマークになった。惹いてはのち、即位後のあらゆる活動の抜きんできた辛抱強さに現れたのではないか。

沼津の海辺で地元の子供たちと一緒
（昭和30年7月）
〈中日新聞社提供〉



昭和19年春、集団疎開

昭和19年4月われわれは5年生になった。戦争が激化し米軍の日本本土への空襲が容易になってきた。多くの東京の小中学校は安全な地方への移転、集団疎開を行うようになった。学習院もいち早く実行し、お若い皇族方の戦争からの安全を図った。そして疎開先の学校生活を維持するため、同級のクラスを中心に御用邸近くの旅館、ホテルに疎開させ授業ができるようにした。5月、質素な建物で四谷と同じ授業が始まったのである。

明仁親王は隣りの御用邸から毎日通学された。まだ夏には早く遊泳はできないが、授業以外で砂浜の地曳網、ニュース映画会、裏手の大平山登り、千本松原や牛臥半島への遠足などを行い、もちろん殿下もご一緒だった。体育の代わりに砂浜での相撲大会もよくやった。

戦況は逼迫してくる。7月にサイパン島が陥落、空襲も増えた。我々のいる沼津湾は穏やかだったが、それを囲む大瀬崎岬の外洋は急に深くなり、潜水艦も航行できる。海軍当局から米軍の潜水艦が姿を現したとの情報が入り、沼津は危険だということで、夏休み期間中、殿下は日光田母沢の御用邸に移られた。我々も一足遅れて8月28日、日光金谷ホテルに疎開したのである。

戦後まもなく、和船を漕ぐ

戦争が終わり、中等科3年になる前の春休みのことと思う。東宮職は皇太子殿下の社会見学を常に実施していた。お一人のことも多かったが、学友を誘ったこともあった。その一つに参加した。2泊3日くらい御用邸に泊まり、殿下といっしょに乗用車で登呂遺跡や日本平を見学した。

同級の二階堂誠也（東大卒後NHK技術本部）と1年下級の榎本善之（卒業後三井製糖）が一緒だった。幸い春だったので水泳はできなかったから、ろくに泳げない二階堂と私は助かった。でも御所の企画で和船に乗って海に出た。途中から殿下はお得意の櫓（和船を漕ぐ楫）を持って船を漕いだ。沖へ出たり、けっこう波の高いところで休んだり、船に弱い二階堂と私は、とても閉口したのを憶えている。

ご家族で沼津御用邸の松林の中を
ご散歩（昭和37年8月4日）
〈中日新聞社提供〉



明石元紹氏（あかし・もとつぐ）

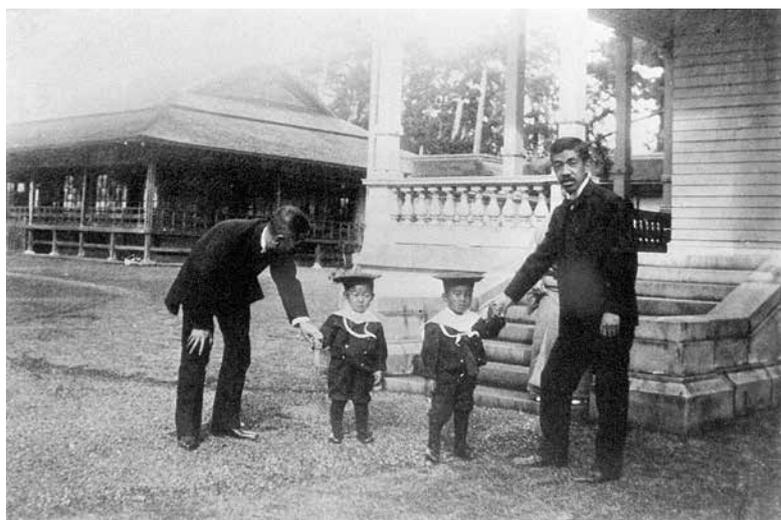
昭和9年(1934)1月生まれ。女子学習院幼稚園入園以来、赤坂御所に居られた上皇陛下のお遊び相手として参上する。昭和15年4月学習院初等科入学以来、上皇陛下の同級生の1人として勉学、戦時中は集団疎開、ご一緒に奥日光で終戦を迎える。

昭和27年3月まで同級生、同年4月慶応義塾大学経済学部入学。昭和31年よりプリンス自動車工業、平成元年東京プリンス自動車販売取締役、平成5年日産陸送監査役、平成11年退任。

学習院高等科時代、上皇陛下と馬術部でご一緒だったため、大学卒業後も皇太子殿下でいらした約40年間、赤坂御所でポロ、打毬の御相手を永らくさせていただく。

沼津御用邸で過ごされた日々

天皇陛下が外出されることを「行幸」といい、皇太后陛下、皇后陛下、皇太子殿下、皇太子妃殿下などの外出を「行啓」と呼んでいる。明治26年7月の皇太子殿下（大正天皇）の行啓から始まる沼津御用邸への行幸・行啓は、44～47頁の年表の通りである。



明治37年、本邸洋館の前で。右から大正天皇、迪宮裕仁親王（昭和天皇）、淳宮雍仁親王（秩父宮雍仁親皇）、侍従（毎日新聞社提供）



大正3年、西附属邸の庭で。学習院初等科時代の昭和天皇（毎日新聞社提供）



昭和37年8月、沼津御用邸で夏をお過ごしになる皇太子・同妃両殿下と浩宮徳仁親王（今上天皇）（毎日新聞社提供）



昭和45年3月、沼津御用邸に最後の行幸啓。お懐かし気に庭をご散策になる天皇・皇后両陛下『沼津御用邸百年誌』



平成6年4月15日、改修された西附属邸の玄関をご覧になる天皇・皇后両陛下（現上皇・上皇后陛下）（中日新聞社提供）



約23年ぶりのご訪問となった沼津御用邸の庭を散策される天皇・皇后両陛下（現上皇・上皇后陛下）（中日新聞社提供）

4 沼津御用邸と地域との関わり

行幸・行啓

昭和20年(1945)の沼津大空襲により、沼津御用邸の本邸は全焼したが、西附属邸が本邸の役目を果たすようになった。明治26年(1893)沼津御用邸が開設され、皇太子(大正天皇)の行啓から、昭和44年(1969)の廃止までの77年間で、歴代の天皇・皇后・皇太后の利用日数は延べ5000日以上に及んだ。同時期の他の御用邸と比べ、利用頻度は沼津御用邸が最も高かった。

なかでも、大正天皇は明治から大正にかけて利用日数が多く、延べ日数にすると1000日以上を沼津で過ごされたことになる。昭和天皇は、皇孫、皇太子、天皇の時期を通じて利用された。昭憲皇太后は皇后であった明治39年(1906)に初めて滞在され、その後は大正2年(1913)まで毎年1月から3ヶ月以上を沼津で過ごされた。とくに大正2年は1月から189日間、12月からご逝去までの126日間を過ごされた。

沼津駅から御用邸

このような行幸・行啓の経路は、まず列車で沼津駅に到着後、特別の乗降口(下の写真)を通過して車などで御用邸に向かわれるのが通例であった。明治のころは駅からは馬車が利用された。騎乗の先導者を先頭に御用邸に向かった。後には馬車から車に変わるが、騎乗の先導者は同じであった。昭和に入ると、先導者がオートバイ(サイドカー)に変わった。その後に先導も車に変わっていった。

駅前の道をまっすぐ進み、狩野川を渡り市場町を通過して、吉田を通過し榎島、楊原神社の前から西村町を過ぎて、前原の行幸橋(地元では「みゆき橋」と呼んでいる)を渡り、御用邸に向かうというコースである(図12の赤の点線)。

昭和2年(1913)には香貫地域の耕地整理が行われ、市役所の東側から前原の行幸橋の西側までの直線道路が完成し、八間道路と呼ばれるようになり、以後は、この八間道路が利用されるようになった(図12の赤の実線)。

駅から御用邸までの沿道には、天皇陛下や皇太子殿下を歓迎する町民、村人で埋め尽くされ、それは御用邸の門前まで続いていたという。



明治後期の沼津駅。乗降口が二つあり、右が一般用、左が皇室用である。左の電柱のそばに見えるのは、沼津・三島間のチンチン電車。(※13)



大正13年、大正天皇を迎える沼津駅前には奉迎ゲートが建てられた。大正天皇はこの時期、健康回復のため、政務は専ら摂政皇太子裕仁親王に任せておられた。(※13)

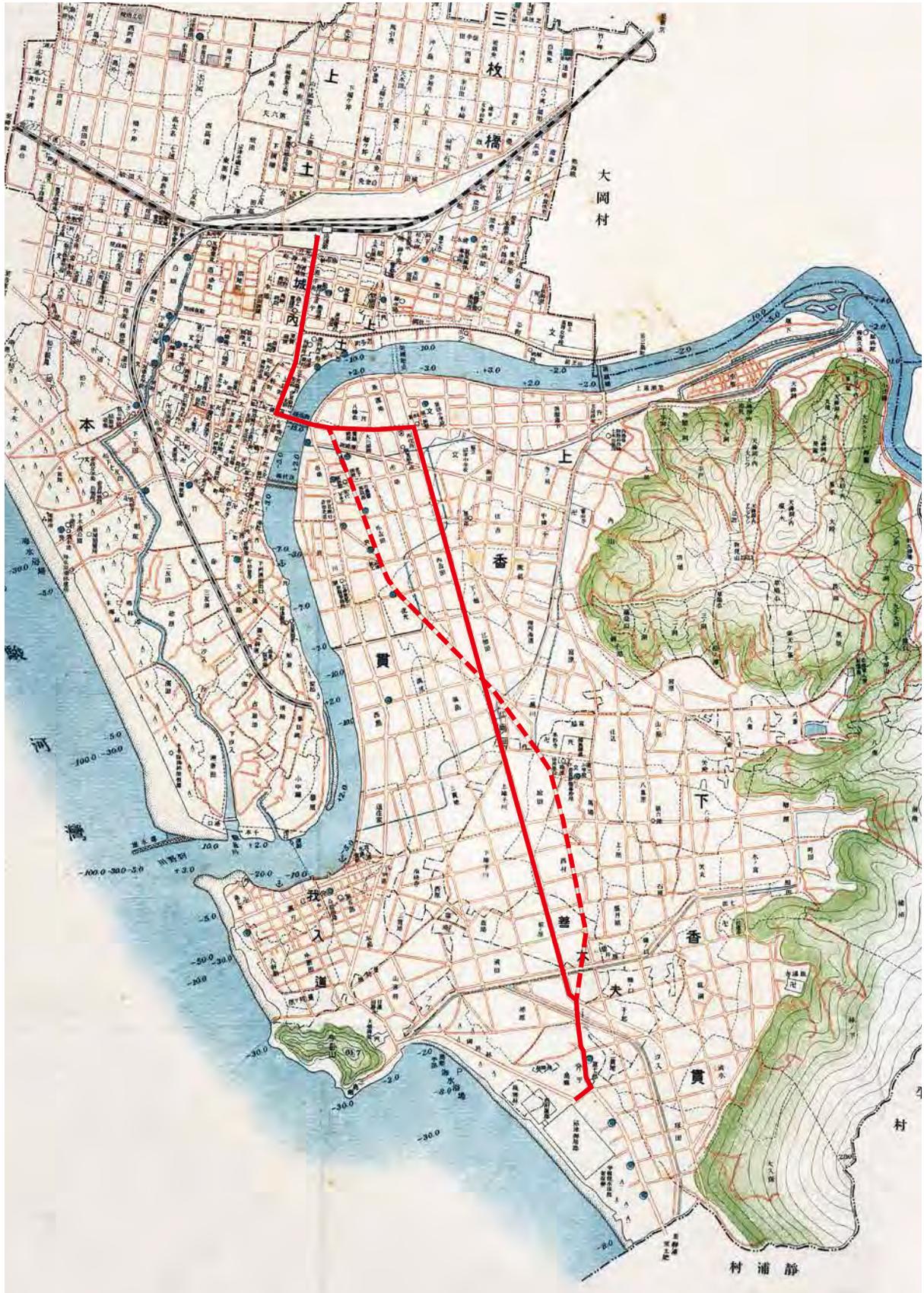


図12 沼津市全図 昭和3年(1914) (*2) (沼津市明治史料館所蔵)

御成橋と永代橋

江戸時代には狩野川を渡る橋はなく、対岸とは渡船で行き来していた。しかし渡船は増水のために停まり、時にはそれが数日に及んだ。人力車などの利用が広まると、渡船の往来は不便なため、橋を架ける動きがあらわれた。

最初に架けられたのが、明治9年(1876)の湊橋(港橋とも表記する)である。湊橋は木造であり、架橋の翌年には洪水で流失するなど、流失と架橋を繰り返した。明治45年(1912)7月28日、鉄骨造の橋が完成し、沼津御用邸に向かう皇族が「御成りになる」際に利用することから大正元年(1912)8月「御成橋」と改称された。なお開通式典は明治天皇が崩御されたため、中止された。現在の御成橋は昭和12年(1937)に完成したものである。

仲町河岸と香貫の吉田を結ぶ入船橋が明治16年(1883)、木造で架けられたが、湊橋と同じように流失と架橋を繰り返した。明治29年の大水で流された後、明治33年に木橋が架けられた。完成式にはご結婚間もない皇太子(大正天皇)・同妃両殿下が渡り初めを行い、そのことを「永代まで伝える」ようにと、橋名を「永代橋」と改めた。

都市としての発展

これまで見てきたように、沼津御用邸の存在は沼津の都市としての基盤を形成していく上で、駅の整備、道路や橋の建設など大きく寄与していたことは間違いない。大正12年(1923)7月1日沼津町と楊原村は、皇太子殿下(昭和天皇)の御成婚をきっかけに奉祝記念して合併し、沼津市が誕生する。それからの沼津市は、都市としての発展がさらに築かれていくことになる。しかし、それは災害と向き合うという大きな試練とともにあゆんでいく道のりでもあった。

新生沼津市となった2ヶ月後の9月1日、関東大震災が発生し、市内にも相当の被害が出た。

さらに半年後の大正13年2月、御用邸に程近い我入道地区で大火が発生し、大半を焼失することとなった。

そして、大正15年12月10日、市街地西部からの出火が大火となり、中心部の大半を焼失するという大きな被害となった。

これらの災害の都度、両陛下をはじめ皇室から多大なお見舞いを賜るなど、物心両面にわたり心強い援助をいただくことにもなった。



大正期ころの御成橋(*14)



大正15年、鉄筋コンクリート製の橋に架け替え後の永代橋(*14)

地域に与えた影響

沼津御用邸の存在が、地域に与えた影響は大きい。それは消防防災活動の強化、保健衛生環境の充実、教育文化面の充実、そして沼津という名の全国的知名度の向上、これらが相乗的な効果を生み、地域経済の活発化を促したということがいえる。

消防防災活動の強化

明治27年(1894)2月、消防組規則が発せられ、島郷地区にも消防部(後の消防団)が設置され、明治36年、御用邸警護のため御用邸備付の消火器具の使用許可を得て、私設の桃郷消防部もつくられた。御用邸の職員といっしょに訓練を行うこともあり、地区の消防活動に取り組んでいた。

近隣の我入道の大火(大正13年)、沼津大火(大正2年、大正15年)など、当時は大火災の発生も多く、防火対策が急がれていた。また、このころは防水防火等の全ては警察の所管事項であったので、地域で行事があると巡査の補助員として駆り出された。大正13年(1924)1月26日、皇太子殿下御結婚式並びに沼津町楊原村合併祝賀会が開催されたとき、市民の旗行列・各区の山車・仮装行列は御用邸まで連なり、桃郷消防組は、その警戒の任にあたった(*4)。

保健衛生環境の充実

感染症対策はとくに厳しく進めなければならなかった。明治36年10月16日、両皇孫殿下(昭和天皇と秩父宮雍仁親王)が御用邸に行啓されるということで、感染症の有無調査のため県の衛生課長を出張させた。実際に行啓の日程が決まると、その期日以前に村民には健康検査が実施された。ときには全村民に予防接種や検便が実施されたこともあったという。

島郷はもちろん、沼津町においては、周囲の衛生に医師会がよく気を配った。感染症が発生するとその届け出を励行させ、いつでも感染症患者の所在が地図上にプロットされていた。また医師会は町の各地でスライドなど用いて衛生思想の啓蒙に努め、感染症患者が出てしまった場合、その隔離病舎の設備充実を図り、ついには、東海随一といわれる隔離病舎を建築した。

沼津御用邸の存在が、医者と町民、村民の衛生に対する知識の向上をもたらし、感染症を未然に防ぐ効果を高めた。当時、この地域の衛生環境は全国的にも優れたものと評価されていた。明治・大正・昭和を通じて、沼津は人口に比べて医師(病院)の多い町だといわれていた(*6)。



桃郷消防部員と御用邸職員の消火訓練の様子
(昭和初期)(*9)



隔離病舎(沼津市HPより引用)

御用邸への食材等の納入

行幸や行啓があると天皇陛下や皇太子殿下に、女官、侍医や警護の皇宮警察などが随行してきた。したがって、御用邸には侍医寮や女官の部屋、警察の屯所などが用意されていた。しかし、天皇陛下や皇太子殿下がお見えにならないときは、現場を管理する責任者のみであった。

行幸啓で天皇陛下や皇太子殿下が滞在されるときは、1日2日ではなく、少なくとも数日、数週間、あるいは数ヶ月に及ぶこともあった。御用邸で過ごされる日常の生活用品は必要で、それは近隣の商人が納めていた。

商人が御用邸に出入りするには、小さな木製の鑑札が用意された。それを入口で提示して、御用邸内の商人の控え室で待たされた。係りから呼ばれるとそのまま大膳調理室へ食糧などを収める場合もあったが、時には内玄関を入り事務室の傍らを通って、女官部屋や侍医寮に注文の品を届ける場合もあった。

衛生面は特に厳重で、事前に店まで係官が来て衛生検査が行われた。家族の中に風邪などひいた者がいると、店の全員が予防接種などを受けなければならなかった。また、天皇陛下などがお口にするものの搬入は極めて厳重で、野菜や肉・魚類などは「御用箱」と呼ばれる木製の蓋付きの箱に入れて届けなければならなかった。(*6)

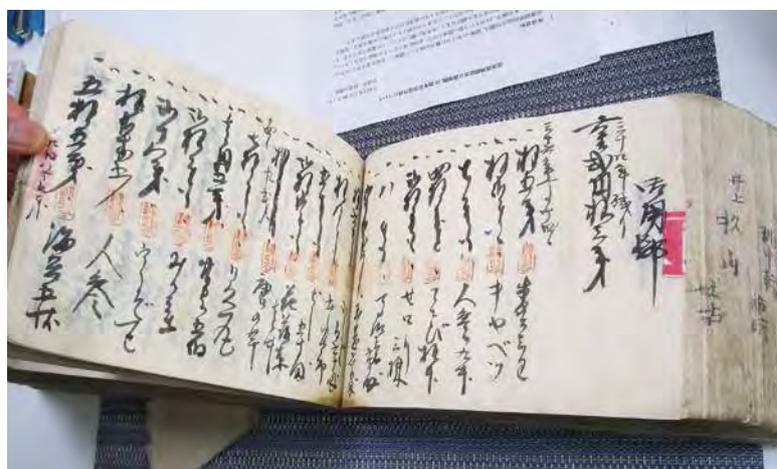
野菜の納入

下の写真は、明治三拾五年の御用邸への納品伝票である福島屋の「大福帳」である。「福島屋」は魚町にある明治10年創業の商店である。かつて魚河岸が目の前にあり、船着き場から荷物の搬出入をしていた。

現在4代目だが、初代から3代目まで御用邸の最初（明治26年）から最後（昭和44年）まで、野菜を中心に納品していた。乾物や珍味物も納めたという。大福帳には、人参、パセリ、セロリ、ワサビ、ウド、カブラ、午房（ゴボウ）、クワイ、ネギ、みつ葉、松茸、ヘチマ、玉葱、菓子、メリケン、辛子、ソース、ハツ頭などたくさんの品々を納めたことが記されている。御用邸から一度に多くの注文があつて納入したという。他の店への注文はなかったらしい。よほど御用邸か



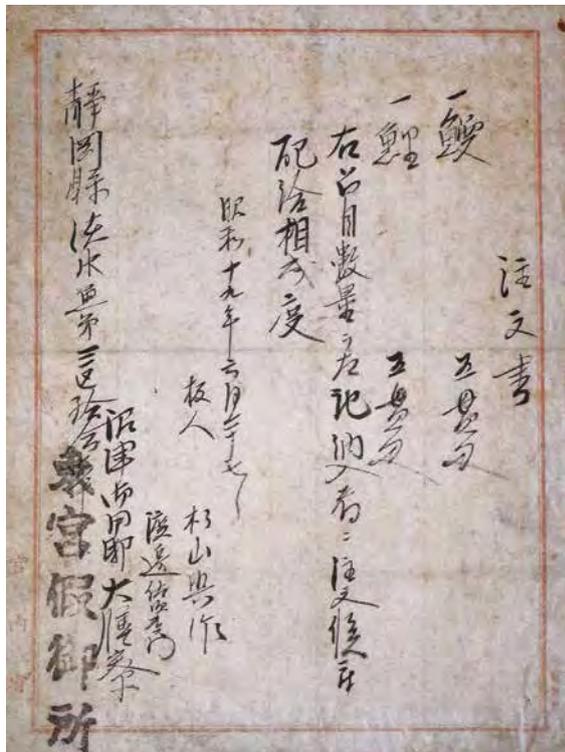
福島屋「大福帳」(明治35年)



福島屋「大福帳」の内容(福島屋所蔵)

らの信用と信頼が厚かったものと思われる。

魚の納入



魚の注文書（昭和19年6月27日）（魚与所蔵）

現在、末広町に店を構える「魚与」は、明治43年(1910)創業の川魚問屋である。かつては御成橋に近い出口町で店を出し、狩野川の川漁師と直接取引して商売をしていた。そのため川漁師が獲りたての魚を直接店に持ち込んでくることもあった。川魚全般を扱い、うなぎ、コイ、アユ、スッポンなど扱っていた。市内の川魚の間屋はここだけだった。小売店ではなく、問屋なので、料亭などへ卸していたという。

御用邸からの注文が入るようになったのは、いつ頃からは判明しないが、創業まもなくだったと思われる。

左の写真は昭和19年(1944)6月27日の注文書であり、これが唯一残されているものであるという。戦時中の物資がない時代に、「鰻五貫匁、鯉五貫匁」を注文している。ウナギやアユは狩野川の上流で上質のものがよく獲れたという。

「右品目数量ヲ左記納入者ニ注文」とあり、「板人杉山與作」の名前が確認できる。東宮假御所としての沼津御用邸の大膳寮が注文したものである。大膳寮とは、調理を担当する部署である。

このように野菜や魚など食材については、市内の信用と信頼のおける商店に対して、直接注文して納入していたのである。



狩野川右岸の永代橋すぐ下にあった魚市場(昭和初期) (*13)



狩野川右岸の御成橋付近（大正6年頃）(*13)

大中寺と沼津御用邸

行幸・行啓により沼津御用邸に滞在された天皇陛下はじめ、多くの皇族の方々は、その間、御用邸内だけで日々を過ごされたわけではない。愛鷹山で獵をしたり、乗馬で遠出したり、皇孫殿下が幼少のころは近所に遊びに出かけられたこともあった。これらの外出の中で、よく御成りになった場所のひとつが大中寺である。

大中寺は愛鷹山の裾野に位置する臨済宗妙心寺派の禅寺である。ほとんど自然そのままの森に覆われた4000坪ほどの寺域に本堂が建つ。寺の表門は、木造瓦葺き、入母屋造りの二層の楼門で、上層は鐘楼であり、山門と鐘楼を兼ねた形式である。寺記によれば天保12年(1841)建立されたものといわれ、市内唯一の鐘楼門である。

明治30年(1897)3月13日、皇太子殿下(大正天皇)が初めて大中寺にお立ち寄りになり、寺中を逍遙された。このときから大中寺への行啓がはじまる。

昭和天皇と大中寺

明治42年(1909)2月16日には、9歳の裕仁親王(昭和天皇)、8歳の雍仁親王(秩父宮)、5歳の宣仁親王(高松宮)の三皇孫が馬車で大中寺に行啓した。そのときの御様子を当時の住職は、「何と申しても人の子、腕白ざかりのお年頃である。当寺においでの際はご自由に伸びのびとお遊びになつたらしい。(中略)天皇陛下は木登りなども至極お上手であつたそうである。(中略)俗にいう茶目ッ気もそうとうなものが、おありのようだった」(*15)。また別の日には、境内をこっそり抜け出され、「お伴の人達の大きさをよそに、お連れ戻そうとしても、こんどは逃げ足が早くてつかまらない。(中略)殿下とも知らずに、村の人たちは町から来た子供ぐらいに思って、あれこれとからかい半分に、いい加減にはなし相手になつたということであつた。」(*15)。

後年、昭和21年(1946)6月18日、昭和天皇は敗戦後の沼津市巡幸のおり、警察署望楼から市内を展望された。昭和天皇は北方を向き、「大中寺はあの方向か」と聞かれた。市長が「さようございます」と答えると、昭和天皇は「実になつかしい」と仰つたという(*15)。

昭和天皇が大中寺に行啓されたのは皇孫時代を中心に6回であり、大正天皇は5回、貞明皇后は2回、そして昭憲皇太后(明治天皇の皇后陛下)が9回と最も多い。



大中寺 鐘楼門 天保12年(1841) 建築



大中寺 恩香殿と通玄橋 明治42年(1909) 建築
国登録有形文化財

昭憲皇太后と大中寺

昭憲皇太后は、明治42年(1909)61歳から、崩御の前年、すなわち大正2年(1913)65歳までの5年の間に、大中寺への行啓が実に9回に及んだ。そのうち2回は白雲軒を、のちの7回は恩香殿を便殿（皇室の休憩所）にあてられた。白雲軒は離れとしてこじんまりと整った4部屋づくりの一部2階という建物で、梅を観るにはよい位置にある。恩香殿は明治42年に便殿として新たに造られた建築である。

昭憲皇太后は晩年になって大中寺に行啓されたが、「この山寺の禅寂がよほど御心にかなわせられたのであろうか、観梅に、筍がりをかねた観桜に、林下逍遙の御遊が多かった」(*15)と住職は述べている。

昭憲皇太后と地域の人々

「くれぬまに沼津のさにつきにけりしばし見てこむ海のけしきを」これは昭憲皇太后が明治42年、初めて沼津御用邸に行啓されたとき詠まれた歌である。皇太后は御用邸に滞在中、大中寺だけでなく、しばしば近隣にお出かけになられた。我入道海岸、牛臥山、千本浜などは手近な散策場所であった。海を眺め、花を摘み、また日枝神社（山王さん・平町）には毎年桜花の観賞に出かけられ、そして幾つもの歌を詠まれている。

沼津の風光をこよなく愛しておられた昭憲皇太后であった。行啓の折にはしばしば海辺に足を運ばれ、我入道の浜に草を摘みに出かけられた。我入道の人々は皇太后の遺徳を偲び、昭和10年(1935)「昭憲皇太后御摘草記念碑」を建立した。

芹沢光治良と沼津御用邸

明治29年(1896)我入道に生まれた芹沢光治良は、小学生のころ、皇孫殿下お三方が村中を歩かれていたとき、話しかけられた。皇孫殿下は洋服で帽子をかぶり、西洋人のように見えたが、話しかける言葉が日本語なので気軽にお答えしたという。「村に御用邸がなかったら、私達は文明の光など知らず、一生平凡で、終わったことだろう。」「万一御用邸がなかったら、私は一生涯、平凡な漁師で終わつたろう。」(*16)と静岡新聞に寄稿している。



建設中の昭憲皇太后御摘草記念碑
(第三地区我入道連合自治会所蔵)

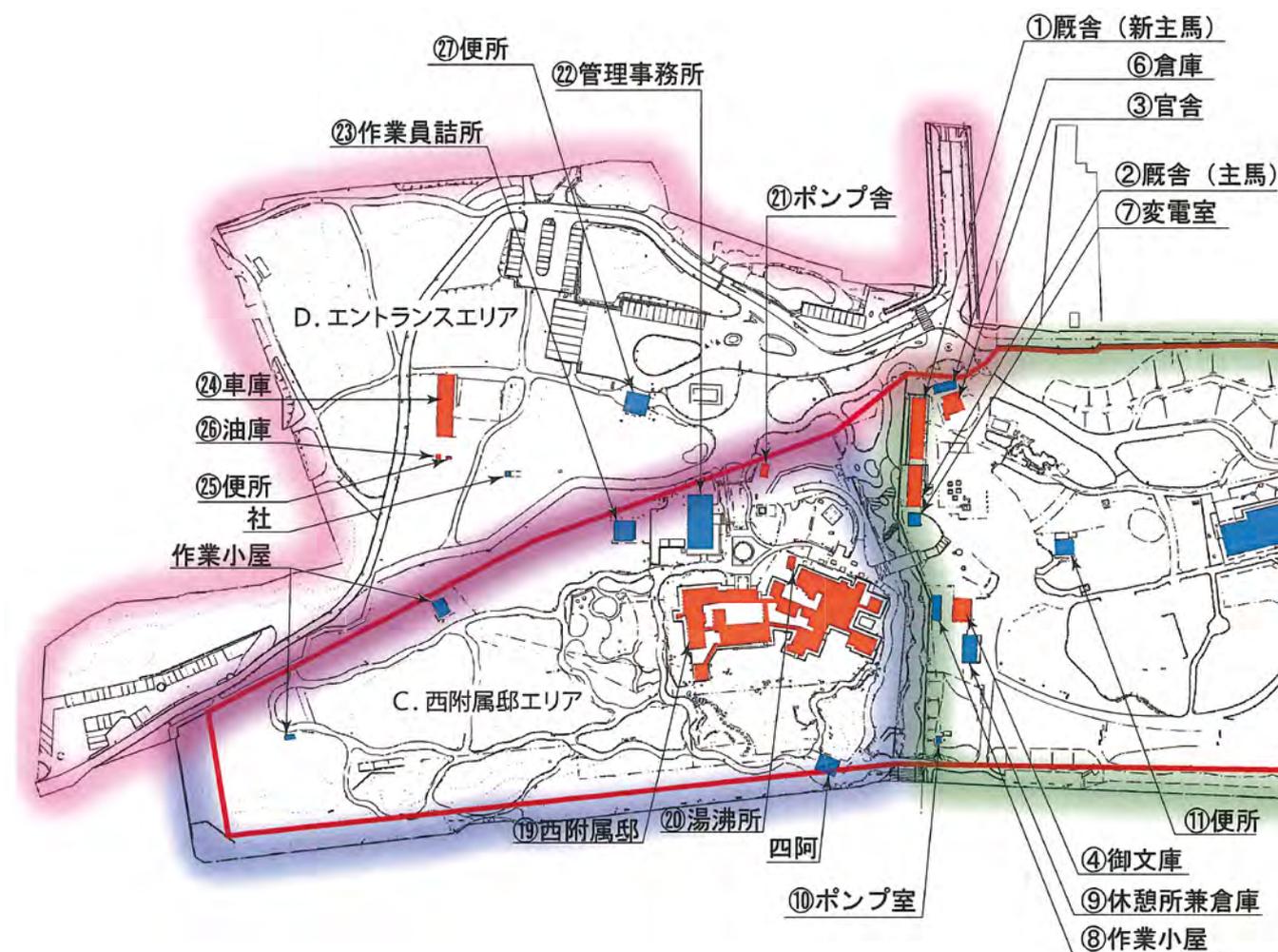


完成した昭憲皇太后御摘草記念碑(1935)
(第三地区我入道連合自治会所蔵)



昭憲皇太后歌碑：千本松原

5 市民の誇りとしての沼津御用邸記念公園



沼津御用邸記念公園は、平成28年(2016)10月3日、近代日本における海浜保養地の優れた風致景観を伝える事例であり、旧沼津御用邸苑地として、国の名勝に指定された。

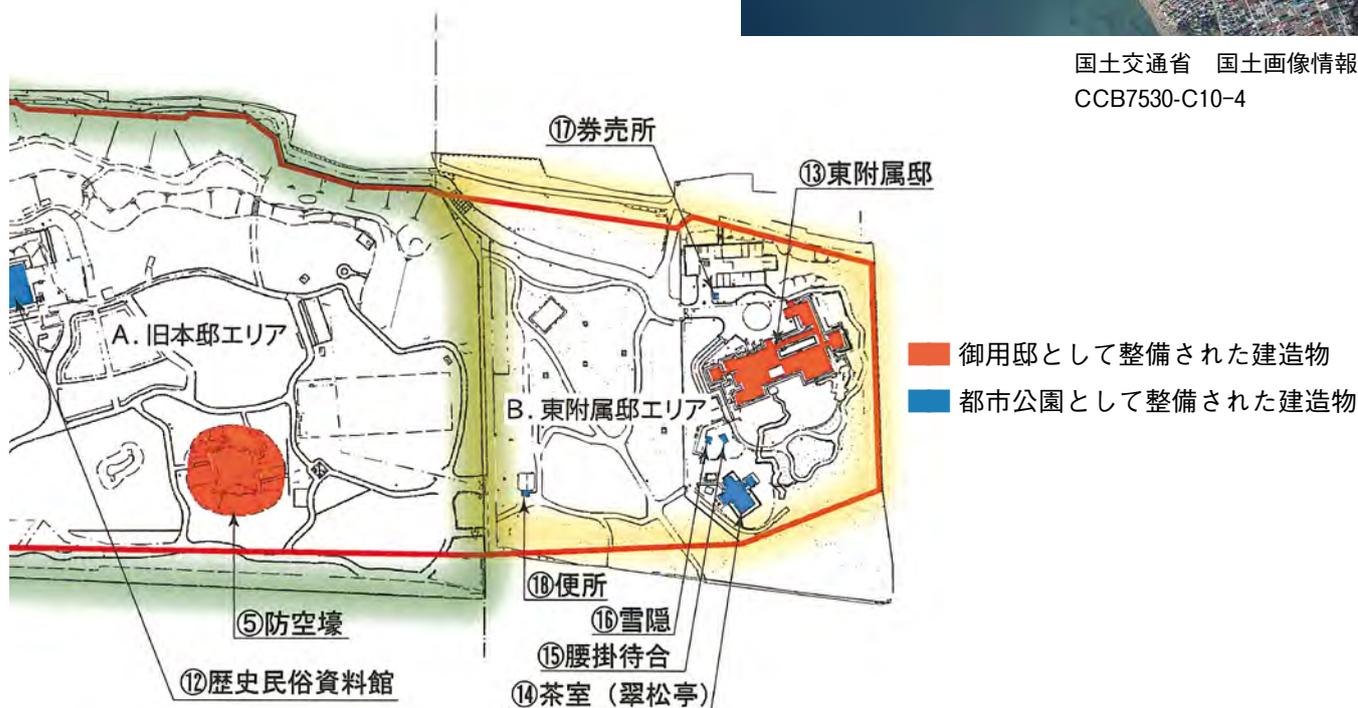
名勝としての「旧沼津御用邸苑地」は、A旧本邸エリア、B東附属邸エリア、C西附属邸エリア、Dエントランスエリアの4つの区域に分け、保存活用・維持管理を行っている（ABCが名勝指定範囲：上図の赤線で囲った区域）。

旧本邸と西附属邸の間には海浜に至る通路を設けて、旧御用邸後背地と島郷海岸をつなぎ、旧本邸と東附属邸の間に広がるクロマツ林は、両邸の風致景観を連続させている。旧本邸や西附属邸の海浜沿いの林間からは、駿河湾の風光明媚とともに牛臥山の姿を窺う風情に優れ、西附属邸からはクロマツ林越しに富士山の美しい姿を望む。苑地の全体は、西附属邸と東附属邸に保存されてきた建造物群のほか、敷地を囲む石積みの塀と門とともに、近代に造営された沼津御用邸の風致景観が保持されている。

「名勝」とは、日本における文化財の種類のひとつで、我が国にとって芸術上または鑑賞上価値が高いもの、我が国の優れた国土美として欠くことのできないものについて指定を行うもの。文化財保護法第109条第1項における規定による。



国土交通省 国土画像情報
CCB7530-C10-4



旧沼津御用邸苑地の価値

① 近代以前からの松林の優れた風致

旧沼津御用邸苑地の松林は、近代以前からの御林として維持されてきた。苑地内では、海風によって陸地側に傾斜した松林が続き、場所によっては根上がりの松が見られる。また、樹齢を重ねたクロマツが多く残存し、風致的に優れた松林となっている。

② 沼津御用邸苑地の広大な敷地に展開する多様な眺望景観

旧沼津御用邸苑地は、島郷海岸に維持されてきた防風林の中にある。苑地内では松の巨木が叢生する苑路を巡りながら、海岸沿いから広がる駿河湾や牛臥山、伊豆半島への眺望、松越しに望む富士山など多様な景観が展開する。

③ 明治期に建てられた貴重な御用邸建築を備えた名勝地

旧沼津御用邸苑地に現存する建造物群は、明治期に造営されたものとして貴重であり、また良好な状態を保持している。沼津御用邸の造営過程や利用状況については多くの記録が残され、建築史、皇室史の観点から旧沼津御用邸苑地の歴史的価値を高めている。

沼津御用邸記念公園の活用

沼津御用邸は昭和44年(1969)に廃止されることとなり、建物等と15ha余りに及ぶ全敷地は宮内庁から大蔵省に移管され、翌45年には沼津市が大蔵省から無償貸与を受けて「沼津御用邸記念公園」として開園した。

沼津御用邸記念公園は、都市公園として沼津市都市計画部緑地公園課が所管し、平成18年度から指定管理者制度を導入しているため、指定管理者が管理・運営を行っている。また、幾つかのボランティア団体からも協力を得ている。

表2は1年間の開催行事を示したものであり、沼津御用邸記念公園の雰囲気を活かした様々な恒例行事が行われている。

「ホタルを愛でる夕べ」は、東附属邸で小川に舞うホタルの柔らかい光を鑑賞しながらホタル弁当を楽しむ優雅なひとときである。ホタル弁当と茶道東海流によるお茶席を楽しむ風流な夕べである。

「松籟の宴」は、沼津が誇る食・文化・歴史を体験できるイベントであり、菊華展、竹のインスタレーション展、箏曲演奏など盛りだくさんで、老若男女問わずみんなで楽しめる。

地域住民の会が自主的に実施する「とんび凧揚げ」は、大正5年(1916)昭和天皇が皇太子になられて、11月3日立太子礼を奉祝のため、東京「六郷の渡し」で知られた東京都大田区「六



竹の造形を屏風にして箏曲演奏



地域音楽会



書道



島郷とんび凧の会の人たちと見守る人たち(*4)



島郷とんび凧揚げ大会：舞い上がった大とんび凧(*4)

表2 沼津御用邸記念公園で開催される
主な年間行事

月	行事内容
4月	○鯉のぼり掲揚 ○鎧兜と端午のつるし飾りの展示
5月	○「島郷とんび凧の会」のとんび凧揚げ ○和太鼓演奏 ○あじさいまつり ○ホテルを愛でる夕べ
7月	○沼津大茶会 ○七夕飾り
8月	○ひまわりまつり
9月	○沼津御用邸記念公園探検と歴史講座
10月	○栗名月の宴
11月	○松籟の宴 ○菊華展
12月	○写真展（皇室写真展等）
1月	○新春餅つき大会と甘酒提供 ○三世代交流会（島郷自治会）
2月	○観梅茶席 ○桃の節句（雛飾りとつるし雛飾りの展示）
3月	○皇室写真展

郷とんび凧の会」が翼長7.2mのとんび凧10枚を沼津御用邸に献上され、地元島郷の住民も協力して揚げたことが始まりである。

毎年正月、5月5日、11月の記念行事に島郷とんび凧揚げ大会を実施している。

沼津御用邸の建築

沼津御用邸は昭和45年(1970)に「沼津御用邸記念公園」として都市計画決定され、市民の憩いの場として利用されてきた。

平成5年度(1993)から建物の維持保存のため改修と再整備が行われた。

改修にあたっては、素材やデザインなど可能な限り原形に忠実に再現し、建物はもちろん、建具、照明器具、釘隠しなどの飾り金物から家具に至るまで様々な史料を参考にかつての姿に復元した。

都市公園コンクール建設大臣賞受賞

平成6年度(1994)第10回都市公園コンクール造園修景の部門で、沼津御用邸記念公園が建設大臣賞を受賞した。

既存松林を生かし、当時の歴史を偲ばせる空間形成と市民の学習・交流の場の創出が評価された。



和太鼓演奏



東附属邸でクラフト大会

皇室ゆかりの庭園ツーリズム

国土交通省では、地域の活性化と庭園文化の普及を図るため、複数の庭園の連携による取り組みを支援するガーデンツーリズム登録制度を令和元年(2019)に創設した。

沼津御用邸記念公園、神奈川県箱根町の神奈川県立恩賜箱根公園、御殿場市の秩父宮記念公園、三島市の三島市立公園楽寿園の皇室ゆかりの4公園は、観光客の周遊性の向上や公園の新たな魅力創出等を目的に、「富士・箱根・伊豆『皇室ゆかりの庭園』ツーリズム」として、令和元年5月に本制度の第1号に登録された。

上皇・上皇后両陛下から棗・炉縁を下賜

平成6年頃、沼津御用邸記念公園内で伐採された松の古材を使用し、山中塗の塗師・前端雅峯氏が漆器などを制作され、棗(なつめ)、炉縁(ろぶち)などが沼津市へ寄贈された。平成6年4月15日に天皇・皇后両陛下(当時)が沼津市へ行幸・行啓された際、当時の沼津市長が御懇談の機会を頂き、寄贈された棗及び炉縁を両陛下に献上することを検討し、前端氏からのご了解も得られたことから、同年5月12日に市長が皇居を訪れ、両陛下に献上した。

棗及び炉縁は、その後長年、両陛下がお手元で大切にされてきたが、御譲位され、吹上仙洞御所からお移りになるに当たり、「沼津御用邸の松で作られたものであるので、ゆかりの地に戻して、沼津御用邸記念公園で展示する等の形で利用されるのが望ましい」との上皇上皇后両陛下のお考えから、令和元年11月27日に沼津市へ下賜された。

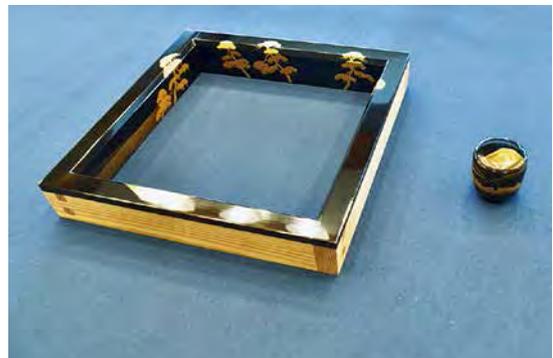
東附属邸・茶室の魅力

東附属邸は、かつての御学問所としての歴史と伝統を引き継ぎ、市民の交流の場として、文化・教養活動の拠点として改修整備された。

明治期の歴史的建築物に、厨房・水屋・トイレ・



本邸表門 明治39年8月築造 洋風の門は他の御用邸にはない 本邸の洋館(沼津大空襲で焼失)と対をなす



炉縁(ろぶち) 棗(なつめ)



東附属邸 かつて皇孫殿下の御教室、実験室として使われていた場所 御殿の庭は当時の雰囲気を保つ



東附属邸 茶室(翠松亭・駿河待庵)八畳の広間、四畳半の小間、京都大山崎の国宝待庵を写した茶室



西附属邸 入母屋造り棧瓦葺きに下屋が回っている



西附属邸 御食堂 壁と襖は間似合紙(和紙)張り 障子は手漉き和紙 棧と棧の間に細い継ぎ目がある



西附属邸 御座所 柱は黒松、鴨居や長押は赤松 日本の住宅で松使用は珍しい 畳敷きの上に絨毯



西附属邸 謁見所 広さは10畳で畳敷きの上に絨毯が敷き詰められ、さらに中央に部分敷き 右は照明

空調設備等最小限の改修を施し、研修室として利用できるものにした。茶道、華道、香道、礼法、着付け、和歌、俳句等の伝統的日本文化を研修する場として最適の環境にある。

茶室〈駿河待庵〉は、平成元年(1989)の名古屋・世界デザイン博覧会のパビリオンに待庵の写し茶室として出展された後、名古屋市の料亭が所有していたものを沼津市が無償譲渡を受け、平成10年に沼津御用邸記念公園内に移築された。

西附属邸、建築の魅力

●明治期の貴重な大規模木造住宅建築

沼津御用邸は公式な部分と居住部分が一体となって大規模な住宅建築として貴重な例でもあり、明治時代の大規模な木造住宅の遺構が少なくなっている現在、住宅史的な価値も高い。

●伝統技法に基づく建築と造作

この建物は一見質素に見えるが、使われている材料はいずれもよく吟味された素晴らしいものである。造作も手が込んでいて、今では失われてしまった伝統的な技法を随所にとどめている。

●第一級の宮廷家具・調度品

当時使われていた家具備品が保存され、建物の使われ方や暮らしぶりを知ることができる。家具はいずれも明治時代に造られたもので、我が国の宮廷家具として最も代表的なものであり、歴史的にも重要であり、工芸美術的にも水準が高い。

●和洋折衷方式の建築

和室の畳敷きの上に絨毯を敷き、椅子、テーブルを使用するという和洋折衷方式を採用している。皇室関係の建物によく見られる慣習であり、当時の住まい方がよく示されている。近代日本の歴史の一端を語りかけてくれる貴重な文化遺産といえる。

クロマツ林に囲まれた日本庭園という優れた環境は、訪れた人々を必ずや雅びの世界に誘ってくれるだろう。

年表

沼津御用邸に関連した主なできごと

年	西暦	沼津御用邸や周辺地域のできごと	沼津御用邸への行幸・行啓、皇室関連	全国的なできごと
明治元年	1868	12月 沼津兵学校及び附属小学校設立		9月 明治と改元
9年	1876	6月 ドイツ人医師エルヴィン・ベルツ氏来日		
12年	1879		8.31明宮嘉仁親王（大正天皇）ご誕生	
22年	1889	2月 沼津駅開設。6月 沼津町、楊原村ほか2村成立		2月 帝国憲法公布 7月 東海道線開通
24年	1891	このころ島郷周辺に大山巖、川村純義、西郷従道などが別荘を設けていた		
25年	1892	12月 駿東郡町より楊原村長に島郷御料林内に御用邸建設の村内意向を文書で問合せ有、村内は勿論、該当の漁民も苦情等はないと回答		
26年	1893	4月 沼津御用邸（本邸）工事着手、7月完成	○皇太子殿下（大正天皇）初めての行啓 7.23～8.20 29日間	
27年	1894		○皇太子殿下1月から41日間 ○皇太子殿下7月から30日間	7月 日清戦争始まる
29年	1896	3月 本邸新御座所ほか増築	○皇太子殿下1月から94日間 ○皇太子殿下12月から89日間	
31年	1898		○皇太子殿下4月から28日間 ○皇太子殿下7月から87日間 ○皇太子殿下12月から97日間	
32年	1899	このころ沼津郊外の門池を皇太子殿下の御猟場と定め、以後10年以上、主に冬季に使用	○皇太子殿下6月から23日間 ○皇太子殿下10月8日間 ○皇太子殿下11月から40日間	
33年	1900	1月 本邸御車寄、御湯殿ほか増築 このころ狩野川河口の橋の渡り初めを皇太子同妃両殿下にお願いし、後に永代橋と命名	○皇太子殿下4月から24日間 5.10 皇太子殿下、九条節子妃ご結婚 ○皇太子・同妃両殿下6月2日間 ○皇太子殿下10・11月計17日間	
34年	1901	11月 本邸洋館新築	○皇太子殿下12月から32日間 ○皇太子殿下2月から32日間 4.29 皇太子第1男子として迪宮裕仁親王（昭和天皇）ご誕生 ○皇太子殿下12月から36日間	
35年	1902	裕仁親王、沼津御用邸隣の川村伯爵別邸に7月及び11月からの計224日間ご滞在	6.25皇太子第2男子として淳宮雍仁親王（秩父宮）ご誕生	
36年	1903	裕仁親王、川村伯爵別邸に10月から221日間ご滞在 12月 赤坂離宮東宮大夫官舎を移築し、東附属邸を設置	○皇太子殿下1月から70日間 ○皇太子妃殿下1月から52日間 ○皇太子殿下10月8日間 ○皇太子殿下11月20日間	
37年	1904	裕仁親王、川村伯爵別邸に11月から126日間ご滞在 このころベルツ博士は沼津御用邸をよく訪れ、皇太子ご一家のことを日記に記す	○皇太子殿下1月から41日間 ○皇太子殿下12月から36日間	2月 日露戦争始まる
38年	1905	6月 ベルツ博士夫妻ドイツに帰国 7月 宮内省は川村伯爵別邸を買い上げ、皇孫殿下御用邸として西附属邸を設置	1.3 皇太子第3男子として光宮宣仁親王（高松宮）ご誕生 ○皇太子殿下1月から55日間 ○皇太子殿下3月から35日間 ○裕仁、雍仁、宣仁の各親王、西附属邸に11月から136日間ご滞在	9月 日露講和条約調印
39年	1906	皇后陛下、千本浜など近隣各地お出掛け 12月 西附属邸に宮城内賢所附属建物を移築	○皇后陛下1月から99日間 ○裕仁親王12月から97日間	
40年	1907	12月 千本浜に沼津公園を開設	○皇后陛下1月から82日間	

年	西暦	沼津御用邸や周辺地域のできごと	沼津御用邸への行幸・行啓、皇室関連	全国的なできごと
明治 41年	1908	7月 西附属邸御車寄ほか増築	○皇后陛下 1月から102日間 ○裕仁親王 12月から82日間	
42年	1909		○皇后陛下 1月から95日間 ○皇太子殿下 4月2日間	
43年	1910		○裕仁親王 1月から74日間 ○皇后陛下 1月から100日間	
44年	1911		○裕仁親王 1月から77日間 ○皇后陛下 1月から102日間	
45年	1912		○皇太子殿下 2月 日帰り ○皇太子殿下 4月2日間 ○皇太子殿下 6月8日間 ○裕仁親王 12月から94日間 ○皇后陛下 1月から97日間 ○皇太子殿下 4月3日間	
大正 元年	1912			7.30 明治天皇崩御 第123代大正天皇 大正と改元
2年	1913	本邸調理所ほか増築	○昭憲皇太后 1月から189日間 ○皇太子殿下（昭和天皇） 2月45日間 ○昭憲皇太后 12月から126日間	
3年	1914		○皇太子殿下 3月2回 4日間 4.11 昭憲皇太后崩御	7月 第1次世界大戦 始まる
4年	1915		○皇太子殿下 12月から95日間 12.2 第4男子として澄宮崇仁親王（三笠宮）ご誕生	
5年	1916		○皇太子殿下 12月から79日間	
6年	1917		○皇太子殿下 12月から85日間	11月 ロシア革命起こる
7年	1918		○皇太子殿下 12月から92日間	
9年	1920		○皇太子殿下 1月から65日間 ○皇太子殿下 6月2日間	
10年	1921		○皇太子殿下 1月から26日間 3月 皇太子殿下 欧州外遊ご出発 ○天皇陛下 5月から37日間、皇后陛下 6月23日間	11月 大正天皇ご病気のため皇太子殿下摂政ご就任
11年	1922	西附属邸御玉突所増築	○皇太子殿下 1月8日間 6.20 皇太子殿下と良子女王とのご結婚勅許	
12年	1923	7.1皇太子殿下ご成婚を奉祝記念し沼津町と楊原村が合併、沼津市市制施行	○皇太子殿下 1月8日間 ○天皇陛下 12月から173日間	9.1関東大震災発生
13年	1924	2月 御用邸に近い我入道地区で大火発生御用邸にご避難中の天皇・皇后両陛下と皇太子・同妃両殿下からお見舞いを賜る	1.26 皇太子殿下 良子女王とご結婚 ○皇太子・同妃両殿下 1.27,28の2日間 ○皇太子殿下 2月2回 4日間 ○天皇・皇后両陛下 12月から124日間 ○皇太子・同妃両殿下 1月2日間	
14年	1925			
15年	1926	12.10沼津大火発生、市街地主要部焼失皇室からお見舞いを賜る		
昭和 元年	1926			12.25 大正天皇葉山御用邸で崩御 第124代昭和天皇 昭和と改元
2年	1927		○天皇陛下（昭和天皇） 9月2日間	5月 第1次山東出兵

年	西暦	沼津御用邸や周辺地域のできごと	沼津御用邸への行幸・行啓、皇室関連	全国的なできごと
昭和5年	1930	5.28~6.3県内ご巡幸。沼津では蕪市場などご視察	○天皇陛下6月2日間。県内ご巡幸の際ご滞在	
8年	1933		○貞明皇后3月から69日間 12.23 皇太子（現上皇陛下）継宮明仁親王ご誕生	
10年	1935	2月 貞明皇后より高齢者に真綿が贈られる 8月 我入道に昭憲皇太后記念碑完成	○貞明皇后4月から56日間 11.28 第2皇男子義宮正仁（常陸宮親王）ご誕生	
12年	1937		○貞明皇后7月6日間	
13年	1938		○高松宮・同妃両殿下3月から19日間、東附属邸ご滞在	
14年	1939		○天皇陛下11月4日間、西附属邸ご滞在、近衛師団演習ご覧、大瀬崎行幸	
16年	1941		○皇太子殿下（現上皇陛下）7月から48日間、西附属邸ご滞在	12.8 太平洋戦争始まる
19年	1944		○皇太子殿下5月から2ヶ月間疎開その後、日光田母沢御用邸にお移りになる	
20年	1945	7月 沼津大空襲で市の大半が焦土と化す 御用邸も本邸が焼失	○貞明皇后12月3日間	5月戦災で皇居宮殿が焼失 8.15 太平洋戦争終戦
21年	1946	6.17~18県内ご巡幸 沼津では片倉工業、警察署屋上から市街地ご視察など 貞明皇后 市内各地をご視察	○天皇・皇后両陛下6.17県内ご巡幸の際お立ち寄り ○貞明皇后 長期ご滞在	
22年	1947			5.3日本国憲法施行
23年	1948	皇太子・義宮両殿下 市内各地ご視察	○貞明皇后3月から38日間 ○皇太子・義宮両殿下7月から45日間	
24年	1949	皇太子・義宮両殿下 夏祭り煙火大会を狩野川にご覧	○貞明皇后3月から54日間 ○天皇・皇后両陛下4月2日間 ○皇太子・義宮両殿下7月から41日間	
25年	1950		○貞明皇后3月から39日間 ○皇后陛下3月3日間 ○貞明皇后4月から19日間 ○皇太子殿下7月9日間 ○義宮殿下7月から32日間	
26年	1951		○貞明皇后2月から67日間 ○天皇・皇后両陛下3月2日間 5.17 貞明皇后崩御 ○皇太子・義宮両殿下7月8日間	
28年	1953	11月香貫山に貞明皇后御遺徳記念碑完成		
29年	1954	ご巡幸では内浦湾の生物ご採集、三島市の国立遺伝学研究所ご視察	○天皇陛下11月4日間 伊豆地方ご巡幸 ○皇后陛下 関西より御用邸にお立ち寄り ○高松宮妃殿下7,8月	
30年	1955	義宮殿下6月、皇太子殿下7月 学習院游泳場ご滞在		
34年	1959		○三笠宮殿下3月 4.10 皇太子殿下 正田美智子様とご結婚	
35年	1960		2.23 皇太子第1男子浩宮徳仁親王（今上天皇）ご誕生	
37年	1962		○皇太子・同妃両殿下 浩宮徳仁親王ご同伴8月6日間	

年	西暦	沼津御用邸や周辺地域のできごと	沼津御用邸への行幸・行啓、皇室関連	全国的なできごと
昭和 40年	1965		11.30皇太子第2男子礼宮文仁親王(秋篠宮)ご誕生	
44年	1969	11月沼津御用邸廃止。土地・建物を宮内庁から大蔵省へ移管 沼津御用邸記念公園を都市計画決定		
45年	1970	12月6日 大蔵省と沼津市において「沼津御用邸記念公園」の国有財産無償貸付契約締結 7月 沼津御用邸記念公園として開園	○天皇・皇后両陛下3.15御用邸にお別れにお立ち寄り ○皇太子・同妃両殿下8月沼津にお立ち寄り	
46年	1971	11月 第1回沼津御用邸記念公園菊まつり開催	○皇太子・同妃両殿下8月沼津にお立ち寄り	
49年	1974	沼津市歴史民俗資料館の開館		
58年	1983	5月 第1回沼津茶会を御用邸記念公園で開催		
61年	1986	海岸保全区域の指定 6月 防潮堤整備のため公園区域の土地一部を大蔵省に返還、大蔵省から建設省に移管		
平成 元年	1989			1.7 昭和天皇崩御 第125代天皇 平成と改元
3年	1991	7月 沼津・牛臥海岸CCZ整備計画の認定 11月 沼津御用邸記念公園整備基本構想策定作業を開始		
4年	1992	6月 同構想策定 10月 松籟の宴in沼津を御用邸記念公園で開催		
5年	1993	1月 整備工事に本格的に着手。西附属邸改修工事の開始(～H7) 8月 御用邸記念公園に皇太子殿下御成婚記念公園事業の指定 防潮堤整備	6.9 皇太子殿下 小和田雅子様とご結婚	
6年	1994	第10回都市公園コンクール(造園修景部門)建設大臣賞を受賞	○天皇・皇后両陛下4.15 御用邸にお立ち寄り	
8年	1996	東附属邸改修工事の開始		
11年	1999		○天皇・皇后両陛下5.31 沼津にお立ち寄り	
18年	2006	指定管理者制度の導入		
19年	2007		○皇太子殿下11.16 沼津にお立ち寄り	
23年	2011	9月 ぬまづの宝100選に選出		
26年	2014		○皇太子殿下2.13 沼津にお立ち寄り	
28年	2016	10月3日「旧沼津御用邸苑地」の名称で国の名勝に指定		
31年	2019			4.30 退位礼正殿の儀
令和 元年	2019	5月 国土交通省ガーデンツーリズム登録 11月 上皇・上皇后両陛下から沼津御用邸記念公園の松で製作した「棗(なつめ)」及び「炉縁(ろぶち)」が沼津市に下賜		5.1 即位礼正殿の儀 第126代令和天皇 令和と改元
2年	2020	沼津御用邸記念公園開園50周年		

表紙画・題字、挿絵

青木一香（あおき・いっこう）画家・書家

1942 岐阜市生まれ。4歳より沼津に住む。1966 東京芸術大学油絵学科卒業
1968 沼津美術研究所設立 1975 海を描く現代絵画コンクール展（沖縄）
1987 日仏現代美術展水墨画部門優秀賞／「現代の白と黒」展（埼玉県立近代美術館）／
KARUIZAWA DRAWING BIENNALE（脇田美術館 猪熊弦一郎美術館）／
A-Value展（メトロポリタン美術館・マニラ）／郷土ゆかりの画家展（佐野美術館）／
和の紙、韓の紙（静岡アートギャラリー）／「ヒマラヤの光を夢みて」小国芸術村会館（新潟県長岡市）
個展 東京、沼津、裾野、御殿場、神戸、ウクライナ等
沼津御用邸記念公園、さんしんギャラリー善、ギャラリー noir/NOKUTA
2012 雅号を洋子から一香に変える

参考文献・引用文献

- * 1 『東街便覧図略』監修 児玉幸多 羽衣出版 1994年
- * 2 「沼津城周辺図」江戸時代末頃『沼津市史 別編 絵図集』沼津市教育委員会 2004年
- * 3 辻 真澄『沼津・三島・清水町 町名の由来』静岡新聞社1992年
- * 4 『ふるさと島郷町史』島郷自治会 2016年
- * 5 「駿河国駿東郡沼津町畧圖」1891年『沼津市史 別編 絵図集』沼津市教育委員会 2004年
- * 6 『沼津御用邸のあゆみ』市制70周年特別展 沼津市歴史民俗資料館 1993年
- * 7 『皇室建築 内匠寮の人と作品』監修 鈴木博之 建築画報社 2005年
- * 8 勝又宏幸「戦前における離宮・御用邸の立地および利用形態に関する研究」1991年
- * 9 『沼津御用邸百年誌』沼津市 1994年
- * 10 『沼津市史 通史編 近代』沼津市教育委員会 2007年3月
- * 11 澤村修治『天皇のリゾート 御用邸をめぐる近代史』図書新聞 2014年
- * 12 中嶋照「沼津御用邸の電気工事」『沼津史談』第8号 1969年
- * 13 『目で見る沼津・駿東の100年』郷土出版社 1993年
- * 14 『写真集 沼津いまむかし』郷土出版社 1987年
- * 15 大中寺住職 高橋友道『大中寺と沼津御用邸』1976年
- * 16 芹沢光治良「“文明の光” くれた御用邸」1991年6月4日付け静岡新聞

編集後記

なぜ沼津が御用邸にふさわしい場所として選ばれたのか。その理由の一つを表わしていると思われる絵図（口絵及び11頁参照）の原図を、宮内庁公文書館地下1階の部屋で手に取ったときは、感動であった。和紙に淡く色付けされた絵図は、地形や位置関係がデフォルメされているが、しかしそれゆえに、沼津という場所の魅力を強く印象づけていると感じた。およそ130年前の明治を生きる人がこの絵図を描いたのだと思うと、手が震えるほどであった。

この記念誌の編集は、御用邸があった場所の魅力を伝えるとともに、御用邸や場所にかかわった人々の思いを綴りたいとしてまとめた。松林の中にたたずむ御用邸の建築と樹木や草花と、そして吹く風の協奏が聴こえてくるような空間の雰囲気、いつまでも大切にしたいと思う。

最後に、記念誌作成にあたり、ご協力いただいた方々のお名前を列挙して感謝の意としたい（敬称略）。

第三地区中連合自治会・塩川博三、大中寺・下山光悦、魚与・杉山和男、福島屋・阪東邦彦

沼津御用邸記念公園開園50周年記念誌

発行	沼津市
発行日	令和2年10月10日
企画	沼津市都市計画部緑地公園課 静岡県沼津市御幸町16番1号 055-931-2500(代)
編集	一級建築士事務所アトリエ結 塩見 寛 静岡県沼津市小諏訪523番地の1 055-952-3345
印刷	文光堂印刷株式会社

